Sister　Panic！！

春夏秋冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｉｓｔｅｒ　Ｐａｎｉｃ！！

【Ｎコード】
Ｎ９７０６Ｙ

【作者名】
春夏秋冬

【あらすじ】
俺、瀬川和樹は二人の妹と三人で平々凡々に暮らしていた。そこに海外で働く母から突然の電話。「近いうちに妹が三人そっちに行くから。」おっと全く話が見えないぞ？そうかこれは夢だな。夢の中での電話だったんだな。起きたらいつもどおりだ！オヤスミ！！起きたら妹が五人いました。なんか俺嫌われてるし！なんだこれ！？これからどうなるんだ！？
日常系コメディー中心です。

プロローグ

プルプルプルルルル。

「はい、こちら瀬川ですけど。」

「お兄ちゃんのパンツは今何色かな？きゃは☆」

ガチャ。

さーて、寝るかなぁ。

プルプルプルルルル。

「もしもし？」

「も～つれないわねぇ。その声は和樹ね。いつからそんなに冷たくなっちゃったの？お母さんさみしくて泣いちゃいそう…。」

「では何か？今日は純白のブリーフだよ！お母さんは！？とでも答えろと？俺は変態か！」

「心配しなくてもあなたは立派な変態よ。そこだけはお母さん譲れないわ。ちなみにパンツは穿いてないわ。」

「譲れ！！そこは俺の名誉のためにも全力で譲ってくれ！！そしてパンツを穿け！！」

「そんなことより、そっちはどう？ちゃんとやってる？」

「そんなことで片付けていい問題なのかは甚だ疑問だが、まぁ問題なくやってるよ。」

「成績も？」

「失礼。訂正させてもらおう。成績以外は問題なくやってます。」

「その点は今度帰ったときにじっくり聞くとして、千夏達は元気？」

しまった。自ら地雷を踏んでしまった。

「お手柔らかにお願いします。あ～千夏も愛菜も相変わらずだよ。ちゃんと元気にやってる。掃除、洗濯その他もろもろもしっかり分担してやってるよ。」

「さすが和樹ね。お母さんの聞きたいこと全部理解してるなんて。感動で服を脱いじゃいそう。」

「俺は母さんが全く理解できないよ。で？本題は何？何か言いたいことがあったんでしょ？」

「あら気付いてたの？驚いてお母さんブラが取れたわ。やるわね和樹。」

「なんだ！？それどんな状況だ！？俺にはさっぱり理解できない！

！」

「冗談よ。じゃあ本題に入るわね。ちょっと聞いてる？」

「母さんの冗談は冗談に聞こえない…。で、何？」

「近いうちに妹が三人そっちに行くわ。」

おっと、急に話が見えなくなったぞ？

「ごめん、母さん。もう一度言ってくれる？」

「もう！あんたはついに日本語まで聞き取れなくなってしまったの？あなたの国語のテストの点が心配だわ。さては一桁ね。」

「うるさいな！ギリギリ二桁はあったよ！で、なんて！？」

「ギリギリ！？今、アンタギリギリって言った！？」

え～い！やかましいやつだ！

「そんなことは今は問題じゃないだろ！妹が三人ってどういうこと

だよ！俺には妹は二人しかいないはずだし、その二人は今自分の部屋で寝てるはずだ！なんだ！？分裂したのか！？スモール〇ールのように！？」

「保護者としては大問題なんだけどね…。まぁいいわ。とりあえず、新しい妹が三人そっちに向かってるから、詳しくはその子達に聞いて。ちゃんと優しくしてあげなさいよ。これから家族になるんだから。じゃ。」

ガチャ。

「えっ！？ちょっと！？母さん？母さん！？」

ツーツー。

「切れた…。」

『妹が三人そっちに向かってるから。』か……。

「全くもって意味不明だ…。」

そのつぶやきは誰に聞こえることもなく、漆黒の闇に吸い込まれるように消えていった。

第一話　出会い

ジリリリリリリリリリリリリリ。

ベシ！！

「ん・・・朝か・・・。」

う～ん、なんか変な夢を見たような気がするなぁ。妹が三人増えるとか何の冗談だよ。ただでさえ二人で大変なのに三人も増えたらこの家は崩壊しちまうぞ。

そんなことを思いながら階段を下り、リビングに出る。

「あれ？風呂場の電気が点いてる？」

昨日消し忘れたか？まぁいいや。

ガチャ。

「えっ？」

目の前に全く知らないタオル一枚の少女が現れた。さてどうする？

1、謝る。
2、見なかったことにする。
3、ごまかす。　　　　　　↑ピッ。
4、逃げる。

「失礼、間違えました。」

ガチャ。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「うわぁああああああああああああああああ！！」

ち、小さい肉まんが！！肉まんが二つ！！ええぃ！離れろ俺の煩悩！なんだ？どういうことだ！？あれは一体誰なんだ！？

「何事だ！？兄ちゃん！！」

「どうしたの！？お兄ちゃん！！」

「佳奈！何があったの！？」

「・・・・・・・・？」

更に二人増えました。

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

「つまりどういうことなのかな？」

「私達三人はあなた達と兄妹になりました。」

うむ。全く話が見えてこない。

ちょっと整理しよう。今俺達は三人ずつ二つのソファーに座って向かい合っている。よしここまではいい。

まず俺が座っているほうのソファーは、中心が俺。左が妹の愛菜。右も同じく妹の千夏。千夏が着ているものが俺のTシャツと自分のパンツだけということを除けばこれもよし。

続いて対面、妹を名乗る謎の三人組。中心に雅と名乗る少女。左に先ほどの貧乳少女、名前は佳奈とか。右には、優希と言われている少女がちょこんと座っている。ちなみに全然しゃべらない。まぁとりあえずはよし。

問題はこの三人がいきなり『妹です』とか言って現れたことだ。う～ん、どういうことだ？もしかして隠し子？生き別れの妹。いやい

やそれはない。そもそも父さんは愛菜が産まれる前に死んだからなぁ。

「すいません、面白い顔しているとこ申し訳ないんですが・・・。」

「してない！面白い顔なんてした覚えは一ミリたりとも存在しない！！」

「す、すいません。あまりにお顔の調子がよろしくなさそうだったので、つい・・・。」

遠まわしにすごく馬鹿にされてる気がするのは気のせいだろうか・・・。

「おい！兄ちゃんは面白い顔なんてしてねーぞ！」

おっ！千夏！兄ちゃんを庇ってくれるか！なんて心の優しい子なんだ。兄ちゃん感動で涙が出そうだよ・・・。

「兄ちゃんの顔はいつもブサイクだ！！」

「お、お兄ちゃん！？すごい勢いで目から水が溢れ出てきてるけど

大丈夫！？」

ほっといてくれ！！俺はどうせブサイクだ！！

「すいません・・・。私が変なことを言ったばかりに・・・。」

「あぁ・・・「本当のことだから、気にすんなよ。」」

ボカッ！！

「いってー！！何すんだよ兄ちゃん！！」

「お前はもうしゃべるな！」

話が進まん！！そんなことよりも・・・。

「一体どういうことなんだ？いきなり妹になりましたって言われても、こっちは何がなんだか・・・。」

「瑠璃さん・・・ お母様から何か聞いていませんか？」

母さん？母さんが何かって・・・ま！まさか！！

「も、もしかして、妹が三人向かってるっていうあのコトか！！」

「よかった。ちゃんと伝わっていたんですね。」

「あ、あぁ。」

あ、あれは夢じゃなかったのか。寝ぼけててつい夢の話だとばかり・・・。

「兄ちゃん、妹ってどういうことだ？」

となりの千夏が聞いてくる。ん？なんだ？ちょっと怒ってる？

「お兄ちゃん・・・。どういうこと？」

「おわぁ！？」

愛菜が切れてる！顔は笑ってるけど、心が全く笑ってない！！超怖

い！

「お、お兄ちゃんにもよく分からないんだ！み、雅さん！せ、説明お願いします！！」

「分かりました、私達がなぜこのようなことになったかご説明します。それははるか昔、王国が・・・。」

「な、なるべく、手短にお願いします！できれば俺が殺される前に！！」

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

三十分後～。

「つまり、祖父が亡くなって引き取り手が無くなって困っていたところを母さんがどうにかしたと？」

「要約するとそういうことになります。」

「明らかに初めの２５分はいらなかったよね？王国がどうとか・・・。」

「な、何言ってんだよ、ぐすっ・・・ なんて悲しい話なんだ・・・ひっく。こんな悲しい話で泣かないなんて兄ちゃんは人間じゃない！！」

ひどい言われようだ。

「とりあえず、経緯は理解しました。まぁこっちとしては、驚いただけで別に追い返そうとしてたわけではないし、母さんが決めたなら文句はないよ。な？千夏、愛菜？」

「おう！」

「うん！」

「ありがとうございます！それじゃあこれからよろしくお願いしますね。ほら、優希も佳奈もあいさつして。」

「・・・・・・・・・・ん。」

優希と呼ばれた子が顔を上げて俺の方にトコトコ歩いてくる。な、なんだ！？

「・・・・・・・・優しい匂いがする。・・・・・・・・・・お日様の匂い。・・・・・・・・・・・すぅ」

そういって俺の膝の上に乗って寝てしまった。

お日様の匂い？ちゃんと洗濯したはずだけどな・・・。

「ふふっ。優希ったらもう和樹さんのこと好きになっちゃったみたいね。」

「はぁ・・・・・・・・・。」

よく分からないことを言われたがとりあえず悪感情ではなさそうなので良しとしとこう。

「むぅ・・・。」

「・・・。」

両隣から発せられる凶悪なオーラについては気付かなかったことにしておこう。ってかなんで怒ってんだ？

バンッ！！

「ちょっとアンタ！！」

いきなり、立ち上がって俺を睨みつけるミニ肉まん。もとい佳奈。

「聞いてんの！？アンタよ！アンタ！無視するんじゃないわよ！」

なにやらずいぶん虫の居所が悪いご様子。ここは一つ落ち着いて対処しよう。

「まぁ落ち着け。我が妹よ。」

「だ・れ・が・妹じゃー！！！」

「うわぁ！！」

フォ、フォークが飛んできた！！俺の眉間めがけて！！こ、こいつ！出会ったその日に兄貴を冥土に送るつもりか！危険すぎる！

「な、何するんだ！？いきなり危ないだろ！！」

「うるさい！あんた私に何か一言ないわけ！？人の、そ、その！・・・は、裸見といて！何か言うことはないわけ！？」

どうやらこの娘っ子は、裸を見られたことを気にしているようだ。
といっても実際はタオルで見えてないんだけどな・・・。

まぁでもこのお年頃の女の子はこういうことに敏感だからな。ここは一つ大人の余裕というやつを見せてやろう。

「いいか？よく聞け。佳奈よ。」

「な、何よ！？」

「女の魅力は胸じゃない――――――――――うなじだ！！」

ボゴォ！！

「ぐっはぁ！！」

「ねぇ。お姉ちゃん、この人殴っていい？」

「落ち着いて、佳奈。あなたはすでに殴っているわ。」

「くっ！マニアックすぎたか！」

「お兄ちゃん、そういう問題じゃないよ・・・。」

あぁ・・・これから俺はやっていけるのだろうか・・・。

第二話　佳奈の想い

「私はあんたを兄貴なんて認めないわ！！」

「ぬぅ、この俺のどこが不服だと申すか！！」

「全てよ！！」

ぬぬぅ。手厳しいなぁ・・・。仕方ない。

「わかった。俺が悪かった。素直に謝るよ。裸を見せてくれてありがとうございました。」

ボゴォ！！

「あんた・・・謝る気・・・ある？」

「すいませんっしたぁ！！自分チョーしこいてました！！マジすんませんっしたぁ！！」

やべー！こいつ素手で壁に穴を開けやがった！シャレにならん！

「大体、お姉ちゃんと優希はいいの！？こんなブサイクで馬鹿で変

態な男が兄貴でも！？」

なんつー言われようだ。まぁ事故とはいえ、裸を見られかけたら誰だって怒るわな。ちょっと反省。

「私は大歓迎よ。和樹さんは優しいですし。面白い方ですから。・・・・・・・主に顔が。」

「顔っ！？」

俺そんなにブサイクだったんだろうか。ショックだ・・・。

「・・・・・・・お兄いい匂いがする。・・・・・・・私は好き。」

ふおぉ。この無表情な顔の子の上目づかいは反則級の可愛さだ。おもわず頭を撫でてあげたくなる。

「・・・・・・・んっ。」

気持ちよさそうだ。おもわず顔が綻ぶ。

「ゆ、優希が食べられちゃう！！」

「食べねぇよ！！どういう状況だそれは！？」

本っ当に失礼なやつだなこいつは・・・・。

「とにかくっ！お姉ちゃん達が認めても私は認めないっっ！どうせっ！またどうせすぐに私達なんか煩わしくなって追い出すに決まってるわ！こんな家族のこととかもどうでもよさそうにしか思っていない男なんか私は信じない！！」

バンッ！！！

「大人しく聞いてれば好き勝手言ってくれるじゃねーか。オイ。」

びっくりした・・・。ずっと黙ったままだった千夏が急に立ち上がった。っていうか、ヤバイ！！こいつ久しぶりにマジ切れしてやがる！

「あー、佳奈とか言ったっけ。お前。」

「だったら何よ！」

「お前も兄ちゃんの妹、私達の家族になるんだから教えといてやるよ。」

何を言うつもりだ・・・？千夏？

「確かに、兄ちゃんはブサイクで馬鹿で妹のパンツをさも自分のもののように穿く変態の中の変態だ。」

「待った！ストップ！捏造されてる！兄ちゃんそんなことした覚えないんだけど！？」

「兄ちゃんは少し黙ってて！」

なんだ？どうなった？なんで俺が怒られてんだ？全く理解できないぞ？？

「その変態がなんなのよ！！」

「お前は兄ってのがどういう意味を持って産まれてくるのか知ってるか？ただ単に早く産まれたって意味じゃねぇんだよ。」

「だから何よ！！」

「どんなに早く産まれてもどんなにカッコよくて、スポーツができて頭が良くても、次に産まれてくる弟や妹を守ろうともしないやつは兄なんかじゃねぇし、きっと兄なんて呼ばれねぇよ。」

千夏・・・・。

「でもなぁ！普段どんなに適当でも、どんなにダサくても、変態で頭が悪くても！・・・・・・・・いざというときには絶対に助けに来てくれる！守ってくれる！そんな人だからこそ兄って呼んでんだよ！妹や弟にとって唯一のヒーローなんだよ！！」

「だったら！！だったら何なのよ！！」

「まだ分かんねぇのか！！お前は兄ちゃんを・・・・・！家族のことをどうでもいいと思っている男と馬鹿にした！私や愛菜が誰よりも尊敬してる兄ちゃんを馬鹿にしたんだ！兄ちゃんはなぁ！父さんが死んでから今までずっっと私や愛菜の面倒を見てくれてんだ！守ってくれてんだ！母さんが仕事で忙しい分、私達に愛情をくれてんだよ！誰よりも家族のことを想ってくれてんだ！そんな兄ちゃんを馬鹿にすんじゃねえよ！！」

「ッ！私だって！！私だって．．．！！」

バッ！タッタッタッタ．．．．．．．．バンッ。

「あ！佳奈！！」

「あっ！おい！！」

あー。外に出て行っちまった．．．．．。

それよりも、あいつ泣いてた気がするけど．．．．．気のせいか．．．．？

～～～・～～～・～～～・～～～・

佳奈が外に出て行ってから一時間が経過した。

「千夏、あんまり気にすんなよ？元はと言えば俺が完全に悪いわけだし、お前の言ってくれたことは兄ちゃんメチャクチャ嬉しかったからな。」

「うん・・・・・でも自分でもびっくりしてんだ。兄ちゃんが変態とかブサイクとか言われてるときは全く気にならなかったのに・・・・・。」

「いや、そこは気にしろ！めっちゃ気にしてくれ！！」

妹達の中での俺のイメージは一体どうなってしまっているんだろうか・・・・・。

「和樹さん、ちょっといいですか？」

「あっ。うん、すぐ行くよ。」

なんだ？雅のやつ、やけに深刻そうな顔してたなぁ？

まっ！まさか！佳奈を苛めた罰として何かされてしまうのか、俺は！いやいや苛めてないけど、いやでももしかしたら・・・・・。

「あの、和樹さん？」

「ひゃああい！？今行きましゅるぅ！！」

ちびりそうだ・・・・。

「あの、私が言いたいこと分かりますよね？」

「あぁ。」

仕方ない。俺も男だ。覚悟を決めよう。せめて男らしく『ドンと来い！！』と言ってビンタでもなんでも甘んじて受けよう！！

「和樹さん！！」

「や、優しくお願いしますぅ！！」

「ごめんなさい！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・へ？

「あ、あの、優しくしてくれとは一体？」

「気のせいだ。忘れてくれ。」

どうやら制裁ではなかったようだ。助かった。

「あれ？でもなんで雅が謝るんだ？」

「佳奈のこと怒ってますよね？」

あぁ。そういうことか。

「いや、全然。っていうか元はと言えば俺の責任だからな。」

「そうですか・・・。よかった。」

「それにしても、佳奈っていつもあんななのか？」

「あんなとは？」

「うーん、なんていうか、ピリピリしてるというか気を張ってるというか・・・・・。」

もちろん新しい環境になれていないってのもあるんだろうけど、それ以外の理由があるような気がするんだよな・・・・・。

「気付いてたんですね・・・・・。」

「ってことはやっぱり。」

「はい、あの子のアレにはちょっとした理由があるんですよ。」

「理由？」

「私達が祖父の家で暮らしていたことはお話しましたよね？」

「あぁ。」

両親を早くに亡くした彼女らは早くから祖父の家で暮らしていたらしい。

「実は、祖父と私達はあまり良い関係ではなかったんです。」

あぁ。だからか・・・・・。

「寂しかったんでしょうね。あの子は。甘えられる相手が見つからなかったんでしょう。私はあの子に甘えてもらえなかった・・・・・。そんなに頼りなく見えていたんですかね。私は、姉失格です・・・・・。」

そういって雅は顔を伏せた。泣いているのだろうか・・・・・。

「大丈夫だ!!これからは俺が五人まとめて守ってやる!!だからお前も、もう気負わなくていい・・・・・。」

自然と体が動いていた。自然と口から言葉が出ていた。なぜかは自分でも分からなかったが・・・・・。

「和樹さん・・・・・。」

「違うだろ?」

「えっ??」

雅がきょとんとした顔をする。

「兄さん、だろ??」

「・・・・・はい!兄さん!!」

この家に来て、雅は初めて笑った。その顔はいつものような大人びたものではなく、年相応の無邪気な少女の顔だった。

外では雨が降り出していた。

〜〜〜・〜〜〜〜・〜〜〜〜・〜〜〜〜・

「もー・・・・・最悪だ。私。」

勢いで飛び出してしまい、かといって知らない町で遠くまでいけるはずもなく、がむしゃらに走っていたら、足をひねってしまって痛くて歩けない・・・・・。

「挙句の果てには、雨までふってきちゃったし。」

痛む足を引きずって公園の屋根つきの遊具の下にもぐりこむ。

「私なんであんなこと言っちゃったんだろう。」

裸を見られたことは確かに恥ずかしかったけど、よく考えればあれは事故であって、落ち度は両方の不注意にあったことは明らかだ。じゃあなんで・・・・・。

「やっぱり、羨ましかったのかなぁ・・・・・。」

そう。あの三人を見ていて初めに思ったことがある。それは『信頼』

普通に話してるだけでも伝わってくる。お互いを信頼して、理解している優しい気持ち。

私がずっと欲しかったもの。

お姉ちゃんと優希のことはもちろん大好きだけど、お姉ちゃんはずっと大変そうだった。私達のために自分を捨てて私達の面倒を見続けてくれている。そんなお姉ちゃんにこれ以上負担はかけられない。

「怒ってるよね、絶対・・・・・。」

あの千夏という人が怒るのも当然だ。私だってお姉ちゃんのことをあんなふうに言われたら怒っているだろう。あの人のいう通り、和樹という人もちょっと変わっているけど、とても優しい人だというのは伝わってきた。

その証拠に優希が自らあの人のもとに近づいていったじゃないか。あれには凄く驚いた。優希は滅多に男の人と話さないのに、自分から行くなんて初めて見た。相当優しい匂いがしたのかもしれない。（匂いとかは私にはわからないけど。）

「どうしてこうなっちゃたんだろ・・・・・。」

本当はとっても楽しみにしていたんだ。瑠璃さんはとっても優しかったし、その人の子供なんだからきっと私達を受け入れてくれるって思ってた。実際、受け入れてくれたし、すっごく嬉しかったのに、くだらない羞恥心で全部台無しにしてしまった。

自分で自分に腹が立つ。と同時にもうあそこには戻れないという不安感と孤独感が襲ってくる。

あんなに暖かかった場所なのに・・・・・。やっと見つけた私達の居場所だったのに・・・・・。

「寂しいよ・・・・・。」

頬を伝う涙が一粒また一粒と流れていこうとしたその時ーーーーー。

「こんなところにいたのか・・・・・。」

頭上から声がかけられた。

「う、うそ？な、なんで？」

「服も濡れてるな・・・・・。そんな状態じゃ風邪引くぞ。ほら帰ろう。」

なんで来てくれたの。あれだけひどいこと言ったのに・・・・・。あっ！早くお礼を言わないと！

「な、何しに来たのよ！！私のことなんてほっといてよ！」

また言ってしまった！迎えに来てくれて嬉しかったのに！自分の気持ちを素直に出せない・・・・・。どうしよう。怒っちゃったよね。帰っちゃったらどうしよう・・・・・。

不安が心の中で渦を巻く。でもその彼は・・・・・。

「ごめんな。朝のことは本当に俺の不注意だった。せっかく新しい家族との第一歩だったのに台無しにしてしまった。」

そんな言葉と共にタオルを頭にのせてくる。

「・・・・どうしてそんなに優しくしてくれるの?・・・・・あんなにひどいこと言ったのに。」

私にはわからない。ここまでしてくれる理由も、意味も。

「理由なんてないよ。」

「えっ?」

「俺達、兄妹にはさ、父さんがいないんだ。俺が七歳で千夏が五歳、愛菜がまだ母さんのお腹の中にいるときに、交通事故で死んだんだ。」

その話は瑠璃さんからも聞いていた。

「正直、俺はその時のことをあんまり覚えてないんだけど、母さんは、俺は一度も泣かなかった、強い子だったって言ってた。でも俺は思うんだ。多分俺はその時、泣かなかったんじゃなくて、泣けなかったんじゃないかって。」

淡々と話す彼の目は遠いどこかを見ているようで・・・・・

「隣では千夏が毎日泣いていて、それをなだめるので精一杯だったし、母さんは愛菜のことがあって手一杯だったからかな。幼心に思ったんだと思う。俺が家族を守らないとって。」

とても優しいものだった・・・・・。

「今思えば、ガキが何言ってんだって感じだけどね。その後はやっぱり大変だった。料理は作れないわ、母さんは仕事でいないわ、愛菜は泣き出すわ、千夏は勝手にどっかいくわ、毎日がてんやわんやだった。自分の時間なんてほとんど無かったよ。」

「それでも・・・・・、それでも、妹達が元気で暮らせるなら、それでいいって思ったんだ。」

羨ましい・・・・・。

「だから、俺はたとえ何を言われようと、妹がいなくなったら捜しにいくし、助けを求められたら、必ず助けに行く。それが家族ってもんだろ？」

この人達の絆が本当に羨ましい。

「私にも・・・・・。」

「ん？」

「私にも、いつかそんな家族ができるかな！？」

「何言ってんだよ。」

「・・・・・・・・・・。」

「もうとっくに手に入れてんだろ？お前は俺の妹なんだから。」

「うぇ・・・・・ひっく・・・・・うわぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

我慢していたものが溢れるように涙となって頬を流れていく。

私は彼の胸でまるで赤子のように泣いた。彼はそんな私を守るようにいつまでも優しく抱きしめてくれていた。

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

佳奈をおんぶして傘を差して帰るのには、流石に苦労した。少し運動しないとだめかな・・・・・・・。

「ちょっと！早く歩きなさいよ！濡れるじゃない！」

こいつ・・・・・・・落としちゃってもいいかなぁ。

「早く行かないと、殴るわよ・・・・・・・。」

「ひぃぃぃぃ！」

なんつー暴力的な妹だ！なんでもかんでも暴力で解決するのは兄ちゃんいけないと思います！

「・・・・・・・殴るわよ？」

「暴力万歳！！」

何を言っているんだ俺は・・・・・・・。

そうこうしてるうちに家についた。

「ほら、入れよ。」

「う、うん。」

「大丈夫だよ。みんな家族だからな。」

「うん・・・・・・・。」

ガチャ。

「あっ！お兄ちゃん達帰ってきた！！」

そう言って全員集まってくる。

「佳奈！よかった．．．．．．．．心配したんだよ？」

「．．．．．．．．．．．．．．．．佳奈がいないと私、寂しい。」

「うん．．．．．．．．ごめんね。」

「お兄ちゃん、佳奈お姉ちゃん！お帰りなさい！」

「うん．．．．．．．．愛菜、心配させてごめんね。」

各々が佳奈を迎え入れる。さて、あとは一人だけだな．．．．．．．．。

「千夏、そこにいるの、バレバレだぞ。」

「う～。兄ちゃん、お帰り。」

「それだけか？」

そう言うと、千夏は真っ直ぐに佳奈のほうを向く。ちょっと顔が怖いぞ、千夏。

「あの・・・・・・その・・・・・・ひどいこと言ってごめんなさい。」

「・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・あのっ。」

「あーー！もう！じれったいなぁ！なんだそのへなへなした態度は！！もっとシャキっとしろ！！帰ってきたんなら堂々とただいまって言え！お前は私の妹だろうが！！」

「・・・・・・・うん！ただいま！千夏お姉ちゃん！」

「やれやれ・・・・・・・・・。」

いろいろあったが、こうして、新しい家族を迎えた瀬川家の新しい生活はスタートした。

第二話　佳奈の想い（後書き）

作者に何が起こったのか、異常に長くなってしまいました。しかも後半はやたらシリアスな雰囲気になってしまいました。コメディーを期待してた人ごめんなさい。でもこの話は、和樹たちと佳奈たちが歩み寄る大事な場面だと思ったので書きました。ここからはコメディー全開になっていくと思うので、ここで読むのを止めるなんて言わないで下さい。作者が泣きます。よければ感想等よろしくお願いします。ではまた次回会いましょう。

第三話　家族会議

雅達が俺達の家族になって一週間が経過しようとしていた。

ここで俺達、瀬川家の兄妹の構成を再確認しておきたいと思う。

俺・和樹（高２）→雅（高１）→千夏（中３）→佳奈、優希（中２）→愛菜（小５）※（佳奈と優希は同学年だが、佳奈は４月生まれで、優希が３月生まれなので、実質的には佳奈が姉。）

「う～ん、大所帯になったもんだ・・・・。」

「兄さん、ちょっといいですか？」

「どうした雅？今日も可愛い顔してどうしたんだ？」

「ありがとうございます。兄さんも今日はちゃんと目と鼻と口がついていてかっこいいですよ。」

「今日は！？えっ！？何！？どういうこと！？」

たまについてないことがあるの！？

「そんなことはいいんです、それより家のことについてなんですが・・・。」

「よくない！よくないぞ！？それは俺にとっては何よりも優先するべき最重要事項だ！！」

「いいじゃないですか。今日はついているんですから、何も問題はありません。」

「ついてない日があることが大問題だ！！その日は俺の顔つるっつるなんだろ！？気持ち悪すぎるだろ！！」

目と鼻と口がついてない日ってどんな日だ・・・。今度・・・病院行こう・・・。

「いいじゃないですか。兄さんの顔は目と鼻と口がついててもちゃんと気持ち悪いですよ？」

「うわぁぁぁぁぁぁん！！」

ダッ！！バン！！

「うわっ！？なんだ！？兄ちゃんが号泣しながら外に出て行っちまったぞ！？」

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

我に返って家に戻ってみると、全員がリビングのテーブルに座っていた。

「お兄ちゃん、どこ行ってたの？」

「ちょっと顔のパーツを捜しにな・・・・・・。」

「？？？」

「そんなことよりも、雅お姉ちゃん、いきなり全員呼んでどうしたの？」

俺と愛菜が話していると、佳奈が質問をしていた。そういえばさっき何か言いかけてたな・・・。

「そうだ。一体どうしたんだ？いきなり全員集めたりして。」

「はい、そろそろ家族会議をする必要があると思ったんです。」

「家族会議？」

「そうです。引越しの後片付けも落ち着きましたし、佳奈と優希も新しい生活にある程度なじんできたので、ここらへんでこれからの生活について話をするべきなのではないか、と思ったんです。それに一度こうやって、全員でお話する機会も欲しかったですし。」

「・・・・・・・・自分のお部屋があるの、うれしい。」

優希が嬉しそうにささやく。

「そうだな。そろそろ決めないといけないこともあるしな。」

「はい。」

「じゃあ始めるか！家族会議！！」

「「「「「おーー！！」」」」

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

「では、さっそく家族会議を始めたいと思います。」

今日の議長は雅だ。まぁ俺よりはうまく司会進行してくれるだろう。

「それではまず私のスリーサイズからお話しましょう。」

全然そんなことはなかった。

「待った！それは今は必要ない情報なんじゃないか！」

「うぅ・・・・・・ 兄さんは私の身体なんて全く興味が無いんですね・・・・。」

「あえて言おう！興味津々だ！！」

ボカッ、ギュ、ヒュッ。

「うぼぁ！！」

千夏からはエルボーをもらい、愛菜からはつねられ、佳奈からは手元にあったペンを投げられた。ものすごく痛い。

「な、何すんだよ．．．．！」

「ケッ！」

「お兄ちゃんのバカ！」

「フン！」

なんだ？こいつら、急に機嫌が悪くなりやがった。反抗期か？．．．．．っとそういえば優希からは何もされなかったな．．．．．。

「やっぱり優希は優し．．．．．．。」

ジッ。

なんだかものすごく見られていた．．．．．。睨まれているわけではないが、なんだろう？すごく怒っている気がする．．．．．。

「あ、あの・・・・・・優希さん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・。」

む、無言の圧力！！冷や汗が止まらない！

「ご、ごめんなさい！」

「・・・・・・・・・・・・・・ん。」

それだけを言って視線を前に戻す優希。超怖かった・・・・・・。

「ったく、雅お姉ちゃん、こんな馬鹿兄貴に付き合ってたら日が暮れちゃうわ。話を進めて。」

「その通りね。じゃあまず家事全般からいきましょう。」

「なぜ俺が悪者に・・・・！腑に落ちん！」

もうワケがわからない。

「じゃあ、家事全般はどうしましょうか？何か意見はありますか？」

「普通にサイクルでいいんじゃないか？」

「それだと少し不安ですね。佳奈は料理ができないですし、優希は背が低いので洗濯物を干したりするのは少しつらいかと・・・・・・。」

「なるほど。」

っていうか佳奈、料理できないのか。見た目通りだな。

ヒュッ。

「兄貴、なんか失礼なこと考えてない？」

「な、何も考えてないぞ！」

こいつ心を読みやがった！お前はサトリか！

「なぁ、雅姉ちゃん、得意分野で分けたらいいんじゃねぇのか？」

「千夏がそんなまともな案を行ってくれるなんてお姉ちゃん思ってもみなかったわ。得意かどうか自分で言うのは信憑性にかけるので、推薦方式で一度決めてみましょうか。」

「へへ・・・！それほどでもねぇよ。」

おい、馬鹿にされてんぞ、気付け千夏。っていうか雅は根はドＳなんだな・・・・・・。気をつけよう。

「それじゃあ、まず洗濯は誰がいいと思いますか？」

「兄ちゃんが洗って干してくれる服はいっつもいい匂いがして気持ちいいぜ！」

「おっ？そうか？そう言ってくれると兄ちゃんうれしいぞ！」

「では、『洗濯・兄』と。」

雅が紙に書き入れていく。

「次は料理ね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・お兄の作ってくれる料理・・・・・・・・・すごくおいしい。」

優希がうれしいことを行ってくれる。

「そうか。そう言ってくれると兄ちゃんも作る甲斐があるってもんだ。」

「それじゃ『料理・兄』と。」

「次は掃除ね。自分の部屋は自分でするとして、他の場所ね。」

「悔しいけれど、兄貴の掃除スキルは本当に凄いと思うわ。兄貴が掃除した後にはチリ一つ残ってないもん。」

おぉ、まさか佳奈から褒められるとは・・・・・・。

「ありがとうな。佳奈。」

「べ、別に本当のことを言っただけよ！」

うむ、よいツンデレだ。

「じゃ、『掃除・兄』と。」

「次は買い物かしら。この中に買い物上手はいるかしら。」

「買い物ならお兄ちゃんが一番だよ！だって９９８０円の蟹を５００円まで安くしてもらったことあるもん！」

「ふふん、俺に値切れぬものなど無いわ！」

その店、出禁になったけどな。

「『買い物・兄』と。」

――――――――――――――――――――――――――――――

「決まったわ！」

そういって雅が紙を見せてくる。そこにはこんな風に書いてあった。

家事・兄　　補欠・妹×５

「なぁ・・・・。この図は何かがおかしいと思わないか？」

「「「「「完璧。」」」」」

「どこがだ！？お前らの目は節穴か！？家事の分担作業を決めるのに『家事・兄』ってなんだ！？俺には分担されているようには全く見えないんだが！？」

「ま、まさか！？兄さん、何か不満があるんですか！？」

「まさかどころか不満しかねーよ！！それに補欠ってなんだ！？家事の補欠なんて聞いたことねーぞ！？

「何を言ってるんですか？兄さんは補欠の重要性を全く理解していないようですね・・・・。」

「兄ちゃん、頭わりーなぁ。」

「無能ね。」

「・・・・・・・残念。」

「ひっく・・・・ふぇ・・・・・。」

な、なんだ!?意味不明すぎて混乱してきたぞ・・・・?ここは雅の話をよく聞いてみる必要がありそうだ。

「いいですか?この補欠というものは、いついかなるときでも兄さんの代わりを務められる、いわば親衛隊みたいなものです。」

「ふむ・・・・・。」

親衛隊・・・・・。なんか補欠が必要な気がしてきたのは気のせいか?

「例えば、兄さんが病気や怪我をしたときは私達補欠の出番です!腕の見せ所です!」

おぉ・・・・なんかすごく分かりやすい説明だ。こんなに筋が通っ

ている会話は久しぶりだ。なんだか続きに期待ができそうだ・・・・！

「だから『家事・兄』となります。」

おっとっと、全く分からなくなったぞ？どうしてこうなった？

「えっ？結局のところ、普段の家事は俺ってことだよな？」

「そうなります。」

「なってたまるか！！今の会話に費やした時間を返せ！」

こうして延々と議論を交わした結果、サイクルになりました。

だから、最初に言ったじゃん・・・・・・・・。

第四話　嵐の前の夕食

グツグツ・・・・・トントン・・・・・。

「あっ！違う！佳奈、それは後で使うからまだ入れないでいい！」

「えっ？そうなの？」

「それよりも、そっちの皮を全部剥いてくれ。」

「分かったわ。」

家事やその他もろもろの事がある程度決まった日から、数日が経った。

そして今俺は、夕食の準備を佳奈の手伝いという形で行っていた。

っていうかほとんど俺がやってんだけどね。

「ねえ兄貴。」

「なんだ？」

「これ剥いても剥いても皮が出てくるんだけど、どういうこと？」

「は？何言ってんだお前？」

剥いても剥いても皮が出てくる？なんだそれ？自己再生か？

「ほら、こんなに小さくなっちゃったんだけど。」

そう言って、佳奈が俺にあるものを見せてくる。

「ん・・・・・？」

振り返って佳奈のほうを見てみると。

「なんだこれ？にんにくか？」

そこには小さな三角っぽい形をした黄緑色の何かが転がっていた。

「いや、にんにくなんて俺買ってねぇし・・・・・ なんだこれ？」

「兄貴でも分かんないの？だったらこの野菜、不良品だったんじゃないの？」

「う～ん不良品ねぇ・・・・・。」

確かに何枚もの皮？を剥いて、現れた姿がこんなにんにくもどきだったのなら、不良品だったのかもしれない・・・・・。でもそんな何枚も皮を剥く野菜なんて俺買ったっけ？

「ちなみに元はどんな形をしてたんだ？」

「なんか下のほうがこう丸みを帯びてて、どんぐりみたいな形してた。」

「どんぐり？」

「で、なんか上のほうがふさふさしてた。」

「ふさふさって・・・・。」

おい・・・・・それってまさか・・・・・。

「もしかしてそれ、上のほうが緑色だった？」

「うん。」

「それどう考えても白菜ですよね！？剥いても剥いてもって剥くんじゃねーよ！！」

そして、この目の前に転がってる物体は確実に白菜の芯の部分ですよね！？

「へー・・・・・。白菜って食べるとこあんなに少ないんだ。始めはあんなにおっきかったのに、剥き損だわ。」

「違う！もう何もかもが違う！！そして芯の部分はあんまり食べない！！」

こいつ、本当に料理はダメだな！そして佳奈の陰に隠れて見えなかったけど、奥にあるあの山盛りになってる緑色の物体はどうみても白菜の葉だよな！？

「えっ？じゃあ白菜の食べる部分はいったいどこへ行ってしまったのよ？」

「たった今、お前が毟り取っていったんだよ！！」

「もー！！うっさいわね！！あんたが剥けって言ったから剥いたのよ！！」

逆切れされてしまった。

「あー・・・・・。分かった、分かった。俺の言い方が悪かった。あとのやつは全部これで剥いてくれ。これなら失敗はないから。」

そう言って、佳奈にピーラーを渡す。始めからこうしておけばよかった・・・・・。

「何よこれ？」

「使ったことないか？こうするんだよ。」

そう言って俺は人参の皮を剥いてみせる。

「何よ、簡単に剥ける道具があるんじゃない。始めから貸しなさいよ。」

「あー、はいはい。早く全部剥いてくれ。」

そう言って作業に戻る。

早くしないと千夏達に怒られるぞ。白菜は味噌汁にでも入れよう・・・・・。

・・・・・十分後。

「よし、こんなもんかな。」

「ん・・・・・。あら？難しいわね・・・・・これ。」

下ごしらえを終えると、また佳奈が呟きだした。今度はなんだ？

「おいおい、ピーラー使って皮剥きが難しいなんてありえなあああああああああ！！」

「何よ。うっさいわね。」

「ど　う　し　て　そ　う　な　っ　た　！　！」

なんと佳奈はピーラーで梅干の皮を剥いていた。正気の沙汰とは思えない・・・・・。

「そしてこれを・・・・・・・・・・。」

全てを剥き終った佳奈はおもむろにその梅干を・・・・・・・・・・・。

「待て！、一体何をする気だ・・・・・・・・・！？」

味噌汁の中に突っ込んだ。

「うわあああああああああああああああ。」

涙が止まらなかった。

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

「すっぱ！！なんだ！？今日の味噌汁、白菜だらけの上にやけにすっぱいぞ！？どうなってんだ！？」

「気にするな・・・・・。ちょっとした・・・・・そう・・・・・・・ちょっとした・・・・・・・大失敗だ。」

「どっちなんだ！？兄ちゃん！？」

今度から佳奈は料理のサイクルから外そう・・・・・・・・・。

そう思って何気なく横を見ると・・・・。

「むむむ・・・・・・・・。」

愛菜が味噌汁とにらめっこしていた。

「どうしたんだ？無理して食べなくていいぞ。それは人間の食べ物じゃないからな。」

「ふん！どうせ私は料理が下手ですよ！」

いやいや、下手とか言う次元をはるかに凌駕してリミットブレイクしてますよ？佳奈さん。

「ううん・・・・。佳奈お姉ちゃんが私達のために一生懸命作ってくれた料理を残すなんてできないよ。」

「愛菜・・・・・・・・。」

うわぁぁ、なんて思いやりのある子に育ってくれたんだ・・・・・・・。兄ちゃん嬉しいぞ。

「そうですよ、どんなものでも残すことは良くないことですから。」

そう言いながら、愛菜の方を向いている千夏の空になった味噌汁の容器へ自分の味噌汁を移し変える雅。お前、最悪だな。

「雅姉ちゃん、いいこと言うじゃねーか。ズズズ。すっぱ！！」

そしてまるで何事も無かったかのように味噌汁を飲む千夏。こいつは本当にバカだなぁ。

「わ、私も！い、いただきます！！ズズッ！」

意を決したかのように勢いよく味噌汁を飲む愛菜。ほ、本当に大丈夫か！？

「ふぅ・・・・・・・・。」

あれ？以外となんともない？どうやら無事ーーー

「参りました。」

「じゃない！！しっかり錯乱してる！！味噌汁飲んで『参りました』は明らかにおかしい！！」

だから無理するなと言ったのに！！

「・・・・・・・・・・・・・・・おいしい。」

「へっ？？」

今、ありえない言葉を聞いたような気がする。気のせいか？

「・・・・・・・・・・・・・・・このお味噌汁・・・・・・・・おいしいよ？」

「お、お世辞なんていらないわよ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・お世辞じゃない・・・・・本当に・・・・おいしい。」

「優希・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・ちゃんと、お兄と・・・佳奈の優しい味・・・するよ？」

「あ、当たり前じゃない！！私が心を込めて作ったんだから、マズイわけがないじゃない！！」

「・・・・・・・・うん。」

「あ・・・・・・・・ありがと／／／」

「・・・・・・・・うん。」

佳奈の料理のサイクルへの復帰・・・・・・・確定だな。

「さーてと、じゃあ片付けて、俺は真夜中テ〇ビでも見るかな！！」

「えっ！？兄ちゃん、そんな夜中中起きてて、明日起きれるのか？」

「明日？明日とか何かあったっけ？」

「何言ってんだよ、明日から新学期。学校の始まりじゃん。」

「・・・・・・・・・・・・・・マジで？」

もうそんな時期でしたか・・・・・・・・。

第五話　登校日

今日は４月８日。今日から新学期が始まるんだが・・・。

「なー！兄ちゃん！私の体操服ってどこだー！？」

「だから、昨日言っただろ！お前の部屋の箪笥の上から2番目の左側だ！」

「か、佳奈お姉ちゃん！は、早くしないと遅刻しちゃうよ！」

「わかってる！もー！なんでこんなに髪がまとまんないのよ！！」

「優希！あなたなんで兄さんのＴシャツ着て寝てたんですか！？そこんとこ詳しく！」

「・・・・・・・・・？」

俺達はなぜか朝から焦っていた。

「なんで、全員昨日のうちから準備してなかったんだ！？」

「「「「「兄さんに言われたくない！！」」」」」

ぐぬぬ・・・・！確かに俺は今日が入学式だということすら知らなかったが・・・・・・・・。そんなことは今はどうでもいい！

「とりあえず、早く全員準備しろ！その間に俺は朝飯を作っておくから！」

残された時間はあと二十分ぐらいか・・・・。ギリギリだな。

「兄貴、私の助けが必要なんじゃないの！？」

「気持ちだけ受け取っておこう！！」

「どういう意味よ！？」

「察しろ！！」

悪いが、今佳奈に手伝われたら何もかもが終わる！！

「兄ちゃん！体操服あったぜ！！」

「そうか！それはよかった！」

「どうだ！似合ってるか！？」

「最高だぜ！ってなんで体操服着てんだよ！？制服はどうした！？」

「しまった！見つけた時ついテンションが上がって着ちまったぜ・・・。」

「お前は本当にバカだな！！いいから早く着替えてこい！！」

そうして時間は過ぎていく・・・。間に合うのか・・・？

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

「はぁ・・・・はぁ・・・・。」

「ここまで来れば、間に合うだろ・・・・。」

「まさか、入学式の日から走ることになるとは思いませんでした・・・・。」

俺もだ・・・・。でもまぁ、走ったおかげで遅刻することはなさそうだ。よかった・・・・。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

背中におんぶした愛菜が心配そうな声をかけてくる。

「あぁ、大丈夫だ。もう下ろすぞ？」

「うん、ありがとう。お兄ちゃん！」

ここまで走ってくるのに流石に小学５年生になる愛菜をいっしょに走らせるわけにはいかない。ってことで俺がおんぶしながら走ることになったわけだが・・・・。

いくら愛菜が軽いからといってもそれなりの距離をおんぶしながら走るのは流石につらい・・・・。汗だくだ。

「・・・・・・・・・お兄、お水。」

そう言って、優希がペットボトルを差し出してくる。

「あぁ。ありがとうな。」

「・・・・・・・・・ん。」

それにしても優希は汗一つかいてない。運動得意なのか・・・・？。

「じゃんけん、ほい！は～い、また私の勝ちね。千夏お姉ちゃんほら、がんばって！！」

「ちくしょー！！これで８連敗だー！」

後ろでは佳奈と千夏が荷物持ちをかけて盛大なバトルを繰り広げていた。っつか元気だな・・・・お前ら。

「それにしても、雅達の学校が全員夢ノ宮だったのは驚いたな。」

「そういえば、言ってませんでしたね。」

夢ノ宮学園。それが俺達が通っている学校だ。家から2キロ程離れたところにあり、超がつくマンモス校で、小学校から高校まで全てが広大な敷地の中に纏まって存在する。大学だけが離れた場所にある、いわゆる付属の学園なわけだが・・・・。

「これも、母さんの計らいか？」

「はい。兄妹全員が同じ学校なら、心配も少なくてすむと言ってました。」

「なるほど。」

母さん、あぁ見えて結構心配してくれてんだな・・・・。今度何か送ってやろうか・・・・。

「そして、『ぶっちゃけ決めるの面倒だし』とも言ってました。」

「明らかにそっちが本音だな。」

腐った卵でも送ってやろう・・・・。

「あの・・・・。兄さん、夢ノ宮ってどんな学校ですか？」

「ん？・・・・そうだな。一言で言うとかなり自由だな。大体のことは許される学校だよ。茶髪のやつもいるし、そんな厳しい校則も無いしな。」

「自由ですか・・・・・・・・・。」

「あぁ、あとは生徒のほとんどが変人だらけってことかな。いや、生徒だけじゃなく先生もかな。とにかく変わった学校だけど、いいところだぜ。」

「変人って・・・・・・兄さんよりもですか？」

「それはどういう意味かな？」

なんで俺が基準なんだよ。

「いや、兄さんみたいな人がそんなにいるなんて一般人の私に耐えられるか心配で・・・・。」

「お前、兄ちゃんのこと嫌いなのか？そうなのか？」

俺何かしたっけ・・・・？

「でも・・・・安心しました。」

「ん？」

「いえ、兄さんがそう言うのなら佳奈や優希たちも安心して学校に行けるでしょうから。」

後ろを向くと、愛菜と優希、千夏と佳奈がそれぞれ楽しそうに会話をしている姿が見えた。

「どういう意味だ？」

「別に深い意味は無いんですが・・・・。ほら、私は高校入学という形ですが、佳奈や優希は編入という形になるじゃないですか。そこが少し心配だったんです。」

なるほどな・・・・。学生にとって、転向というものは思いのほか

緊張するものだ。それが編入ともなると、なおさらだ。だけど・・・・。

「大丈夫だろ。佳奈も優希も強い子だろ？」

「そうですね・・・・。」

「それに、中等部には千夏もいるからな。あいつああ見えて人気あるんだぜ？いざとなったらきっと妹達を守ってくれるさ。」

「そうですよね！」

そう言って後ろの妹達を見渡すと・・・・。

「うわー！！これで１８連敗だーー！私はもうだめだー！！」

千夏が叫んでいた。

ちょっと心配になった・・・・。

第六話　悪友

「兄さん、私は少し準備があるので先に行きますね。」

校門が見えた辺りで突然、雅がそんなことを言い出した。

「あぁ。また後でな。」

「はい。」

そう言って、走って校門のほうへ向かっていく。

「お兄ちゃん、私も行ってくるね。」

「おぅ、気をつけてな。」

そう言って、愛菜は校門のレンガ沿いに左方向へ歩いていった。

この学校は敷地がとても広いので、校門が何個も存在し、それぞれ高等部、中等部、初等部に隣接した門がある。別にどこからでも行けることは行けるのだが、大体はそれぞれに近いところを通る。

「兄ちゃん、私達も言ってくるぜ！」

ここで千夏達とも別れる。

「あぁちゃんと佳奈と優希を案内してやれよ。」

「まかせとけって！」

「佳奈も優希もまぁがんばれよ。」

「言われなくても大丈夫よ！」

「・・・・・・・・・・・・・・ん。」

そう言って、3人そろって走っていった。

「やれやれ・・・・・・・。ん？」

佳奈たちを見送っていると、千夏の鞄から何か白いものが落ちた。

「おい！千夏・・・・って行っちまった。」

あいつ、鞄のチャック開けたまんまなの気付かなかったのか？ったく。

仕方なく、落ちたものを拾い上げる。なんだこれ？ハンカチか？

ぺろん。

「って！これパンツじゃねーか！！なんで鞄に入ってんだよ！？」

これどーすりゃいいんだよ・・・・。

「まぁ・・・・帰ってから渡すしかないか。」

そう思い、鞄の中にしまう。なんか落ちつかない・・・・。

「お？和じゃねーか？久しぶり。」

そうこうしていると後ろから声をかけられた。この声は・・・・。

「おう。良か。」

稲葉　良。身長は俺と同じぐらいの１７０ちょい。この学園でも一二を争う変態だ。俺の数少ない悪友。説明終わり。

「お前、春休み何やってたんだよ？全然連絡つかねーし。」

「あぁ・・・・。ちょっといろいろあってな。それよりもお前は何してたんだよ？」

「うん？俺か？いや・・・・ちょっと空を飛んでみたくて毎日座禅組んで気を溜めてた。」

相変わらず、スケールのでかい男だ。

「で、結果は？」

「あぁ、１０ｃｍしか浮かなかった。つまらん。」

「えっ！？何？浮いたの！？マジで！？」

なにもんだこいつ！？

「そんなことよりお前に聞きたいことがある！あのカワイ子ちゃん3人組は誰だ？」

「空飛んだのに興味は女子か・・・・。3人組？なんだそれ？」

「しらばっくれるとはいい度胸だな！お前と千夏ちゃんと愛菜ちゃんの隣にいた3人の美人だよ！」

あー。雅達のことか。・・・・・どうするかな。本当のことを言うべきか・・・・。

しかし、軽く『妹が5人に増えた』なんて言ったら女に飢えてるこいつは何をしでかすかわからない。ここは一つ試してみるか・・・・。

「3人とも俺の彼女だと言ったら？」

「お前を殴り殺す。」

「3人とも俺の妹だと言ったら？」

「お前を刺し殺す。」

「3人ともそこでたまたま知り合った、何の関係もない女子と言ったら？」

「お前を蹴り殺す。」

「なんでだよ！？」

全部、俺が死んでるじゃねーか！？

「うるせぇ！なんでお前みたいなブサイクにそんなに女の子が寄ってくるんだよ！納得いかねぇ！なんで俺の隣には女の子がいないんだ！？毎日お祈りしてるのに！！」

「う、浮いてる！？あまりの怒りに体が浮いてるぞ！？と、とりあえず落ち着け！」

こいつ、本当に浮きやがった・・・・。あの話は本当だったのか!?

「で、結局どういう関係なんだよ!?」

「仕方ねーなぁ・・・・。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「というわけだ。分かったか?」

俺は雅たちのことを超簡潔に説明した。

「ということはだ。和にはもともと千夏ちゃんと、愛菜ちゃんという超可愛い妹が二人いて、そこに新しく超可愛い妹が三人加わったと。お前はそう言うのか?」

「理解が早くて助かる。」

「死ね!」

「うおわぁ!危ねぇ!」

こいつ！つまようじで腹を刺しにきやがった！なんて微妙な攻撃だ・・・・。

「お前みたいなゲス野郎には俺が春休みに編み出した『真・つまようじ殺法』で冥土送りにしてくれるわ！」

「お前・・・・本当に春休み暇だったんだなぁ・・・・・。」

ちょっと涙が出た・・・・。今度遊んでやろう・・・・。

「はっ！待てよ・・・・！？」

「今度は何だ？」

「俺とお前は親友だよな？」

「は？・・・・いきなりなんだ？・・・・まぁ友達ではあるか？」

空を飛ぶ友人・・・・。不気味すぎる。

「つまり、親友の俺達はもはや兄弟も同然だよな！？」

「お前、一体春休みに何があったんだ？バカに更なる磨きがかかって、もはや手がつけられなくなってるぞ？」

前はここまでバカじゃなかったのに・・・・。

「ということは、つまり・・・・。」

あ、聞いてねーやこいつ。

「お前の妹は俺の妹！！」

「ジャ○アンか、お前は！」

ダメだ。バカが移る。さっさと学校行こう。

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

良を置いて校門の前まで来てみると、二本の列ができていた。

「なんだ？」

「おい、どうした和？」

あっ、正気に戻ったのか。よかった。

「いや、何か列ができてんだよ、並ばないと入れなさそうだ。」

「列？ほんとだ。ちょっと見てみるわ。」

そういって１０ｃｍほど浮いて辺りを見渡す良。便利だなその能力。

「あぁ。あれは持ち物検査だな。」

「持ち物検査？」

「去年もやったじゃねぇか。入学式の日に最初だけ。」

「あぁ、そういえば・・・・。」

やったような、やってないような・・・・。

「でも、なんで最初だけやるんだ？意味あんのか？」

「そりゃあるだろ。最初にやっとけば、次いつあるかわからんから下手に物を持ってこれなくなるだろ？牽制と抑制という二重の効果があるんだよ。特に何もしらない１年生には効果抜群だろ。」

「誰だお前！？」

「良だよ！？いきなり何言ってんだ！？」

こんな真面目なことを言う友人を俺は知らない。

「ちょっと！早く鞄出してよ。瀬川！」

良と話していると急に声をかけられた。どうやらいつのまにか、持ち物検査の順番が回ってきていたようだ。

「おっと、悪い。ってあれ？」

「何よ？」

「いや、俺ら初対面だよね？何で名前知ってんの？」

目の前にはふわふわの髪で、眼鏡をかけて、気の強そうなつり目をした女の子が立っていた。腕には風紀委員と書かれた腕章が巻かれている。もしかして俺の隠れファン？

「知ってるに決まってるでしょ。瀬川和樹、稲葉良、あなた達二人はこの学園の有名人なんだから。」

「えっ？俺も？」

後ろの良が反応する。こんなときだけ働く非常に都合のいい耳だ。授業は全く聞かないくせに・・・・。

「えっ？何？俺達そんなに有名人なの？やだなぁ～、やっぱりこの溢れ出るカリスマは抑えきれてなかったか～。仕方ないな～。後ろの女の子達にサインをあげてこよう！！」

良は体中をくねくねさせながら、後ろの女の子達に近づいていった。

気持ち悪すぎる。見なかったことにしよう。

「でも、知らなかったな。俺達がそんなに人気あったなんて・・・・。」

これが噂のモテ期ってやつですか！？ついに俺にも春が！？

「は？何言ってるのあなた達？私は確かに有名人とは言ったけど、人気があるとは一言も言ってないわよ？」

「は？」

えっ？どういうこと？ちょっとお兄さん意味がわからない。

「そりゃそうよ。なんたってあんた達が有名な理由は、去年、全学期全科目で補修を受けたという、今まで誰も成し遂げなかった快挙をやってのけたことだからね。」

「それは、つまり・・・・。」

嫌な予感がプンプンしやがる。

「そ。悪評ってわけよ。ちなみについたあだ名が『補修キラー』、知らなかった？」

「知りたくなかった！そんな情報は知りたくなかった！」

なんて不名誉なあだ名だ！！ちなみに後ろのほうでは、バチーン！バチーン！と誰かの頬を思い切り叩いたような子気味良い音が鳴り響いていた。

第六話　悪友（後書き）

ついに新キャラが出てきました！！
しかし、書きたいことが多すぎて物語が全然進みません！ごめんなさい！
そしてキャラが早くも一人歩きし始めてしまいました。特に雅は一体どうなってしまったんだろうか……。構想ではしっかり者のはずだったのに！

遅くなりましたが、こんな小説かどうかもよく分からないものに目を通して頂きありがとうございます！皆さんのおかげでこの小説、１週間で５０００近いアクセスをいただきました！本当にありがとうございます！

さて、学園もついに始まり、新しいキャラもこれからどんどん出していく予定です。

何かこうしてほしい、ここが見にくい等ありましたら、コメントお願いします。

意見、感想等ありましたら、気軽に書きこんで下さい。

それではまた次回。楽しんでいただけたら幸いです。

春夏秋冬

第七話　持ち物検査

「俺は何も言ってないのに、近づいただけで頬をメチャクチャ叩かれた・・・・。あまりに一瞬の出来事で何がなんだか俺にはさっぱり・・・・・。」

両頬を2倍程に膨らませて、良は俺の後ろに戻ってきた。

「そうか、それは災難だったな・・・・・。」

でも、近づかれた女の子のほうがよっぽど怖かっただろうな・・・・。可哀想に・・・・トラウマにならないといいなぁ。

「これで分かった？あんた達の評判がいかに悪いかが。」

「あぁ、かなりの予想外だ。」

「ま、あんたたち二人とは長い付き合いになりそうだし。私は今年から風紀委員長をやらせてもらう千葉香苗よ。よろしくね。」

「「謹んで、遠慮させていただきます。」」

「なんでよ！？」

誰が好き好んで風紀委員なんかと仲良くなるか！自分から首を絞めに行くなんてドＭか！

「ったく、まぁいいわ。とりあえず鞄を出して。後ろがつっかえてるから。」

「あぁ。」

半分はお前のせいだけどな、と思ったけどもちろん口には出さない。

「ほらよ、さっさと見て、通してくれ。」

そう言って、鞄を差し出す。今日は特になにも入れてないから大丈夫なはずだ。

「ノートに、筆箱、プリント・・・・あら、何か意外と普通ね？」

「意外とってなんだ、意外とって。」

「いや、てっきり、いやらしい本とか入ってるのかと思ったけど。」

「俺は中学生か！？」

そんなもの、学校で見るか！そういうものは、家でじっくり見るもんだ！学校なんかに持ってきたら動揺して落ち着いて見れねぇだろ！？

「なぁ！良？」

そう言って後ろの悪友の方を向く。

「え？あ？な？何もないよ？」

すげぇ動揺していた。

「お前、まさか・・・・？」

「な、何言ってんだよ和！去年、俺が学校にそんなもん持ってきたことが一度でもあったか！？」

「ちなみに、去年一年間で稲葉が没収されたいやらしい本は合計で３６５冊よ。」

「毎日じゃねぇか！少しは懲りろ！」

しかもよく考えたら休みもあるから、ほとんど一日二冊じゃねぇか！とんでもねぇ奴だな！

「つーか、早くしてくれ。遅刻する。」

「誰のせいよ。誰の。まぁいいわ、とりあえず変なものは入ってな――――」

「なんだよ、どうした？いきなり止まって。」

鞄を整理していた千葉の動きが急に止まった。なんだ？トイレか？

「すいません、先生。お願いがあるんですけど・・・・。」

千葉は鞄から顔を上げると、傍らに座っていた監視の先生に声をかけた。

「そうか！俺のあまりに素晴らしい鞄の中身に、おもわず俺が問題児ではないということを先生に証明したくなったんだな！よし、千葉とやら！思う存分言ってやれ！」

「警察を大至急呼んでください！」

「うんうん！警察を呼ぶほど優秀な俺は・・・・・・・・って警察！？」

え！？ナニナニ！？どういうこと！？一体どういうことですか！？千葉さん！？

「おい！いきなりなんてことを言いやがるんだ！お前は！」

「あんた、自分が何したか分かって言ってるの？」

「は？何言ってんだお前？」

全くワケが分からない・・・・。何がどうなってるんだ？

「はぁ・・・・。自分で盗ってきといてしらばっくれるとは見下げた男ね。いいわ、見せてあげる。あんた・・・・これは一体何！？」

そう言って、俺に見せてきたものは・・・・・・・・・・・・真っ白なパンツだった。パンツ？・・・・パンツ。はっ！！

「しまったぁ！！」

「しまった！？今あんた、しまったって言った！？ほら見なさい！さぁ白状してもらうわよ！これは一体どこで盗って来たパンツなの！？正直に吐きなさい！！」

「いや！これは違う！これは別に盗んだとかそういうものじゃない！！」

くそっ！千夏が落としていったパンツのことをすっかり忘れていた！まさかこんなところで見つかるとは・・・・！

「じゃあ！一体なんだって言うのよ！」

どうする？ここで下手に嘘をついても後々困ることになる・・・・。ここは正直に言うしかねぇか。

「違うんだ。聞いてくれ千葉。お前は誤解している・・・・。」

「何を誤解してるって言うの・・・・？」

「これは・・・・・・妹のなんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

な、納得してくれたか？

「先生、刑務所の空きを確認してもらえますか？」

「刑務所！？おのれ！お前は警察に捜査すらさせないで、俺を直接刑務所にぶち込むつもりか！？」

血も涙もない女だな！！

「あんた、まさか他人のだけでは飽き足らず、まさか家族のパンツまで盗むなんて・・・・。しかもそれを堂々と持ち物検査に出すなんて・・・・噂以上の変態ね。」

「お前に言いたいことは髪の毛の数ほどあるが、とりあえず誤解だと再度言わせてもらおう！！」

くっそっ！一体どうしたらいいんだ！このままじゃ、生活指導室を飛び越えて刑務所行きは確定だ！それはいくらなんでも飛び越えすぎだろ！！

「ちょっと待ってもらおうか・・・・。」

一体どうしたもんかと頭を抱えていたら、良がいきなりでしゃばってきた。何を言う気だこいつ？

「千葉、お前は和のことをよく知らずに、憶測で話を進めすぎている。」

「うぐっ・・・・。」

千葉が小さくうめく。ま、まさか良が俺を庇ってくれるなんて！今日ほどお前の親友でよかったと思ったことはない！

「良・・・・。」

「まかせろ。」

良が俺にだけ聞こえるように、小さく呟く。あぁ・・・・ 今お前は最高に輝いているよ。後は全てお前に任せよう！

「千葉、お前は疑問には思わないのか？」

「な、何をよ！？」

「普通、人の下着等を盗んで鞄に入れたことを忘れると思うか？」

「うっ！それは確かに・・・・。」

「そして、それを堂々と持ち物検査に出すやつがいると本当にお前は思うのか？」

「うぅ・・・・。」

あ、あの千葉が何も言えないなんて！すげぇ・・・・ すげぇよ良！

「で、でも、瀬川は実際妹のだって言ったわ！」

「それは、こいつも気が動転していたんだろうよ。思わず妹のなんて嘘をついてしまったんだ。そうだろ和？」

「もちろんだ！」

もちろん嘘だけどね。

「じゃあ！他人のでもなく、家族のでもないとしたら、一体これは誰のなのよ！？」

確かに千葉の疑問は最もだ。実際妹のなんだしその可能性を自ら消した今、良のやつ、どうやって解決する気だ・・・・？

「分からないか？至極簡単なことじゃないか。他人のでもない、家族のでもない。そうなるとこの下着の本当の持ち主はズバリ・・・・・・・。」

「「ズバリ？」」

「瀬川和樹本人のだ。」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」」

思わず、千葉とハモッてしまった。ちょっと待って混乱してます。

ハイ。

「えっ？何？ちょっと待って！え？つまりこういうこと？その下着は瀬川本人ので、いつもそういうのを穿いてるってこと？」

「その通りだ。」

「その通りじゃフガフゴフガ！！」

反論を言いかけた俺は良に口を押さえつけられた。何しやがる！！

「落ち着け、和。今はこうするしか方法はないんだ！」

良が耳元で囁いてくる。

「アホかお前は！いつもこんなん穿いてるって周りに知られたら、俺はこれからこの学園でどうやって過ごしていけばいいんだよ！？」

「じゃあ、大人しくお縄につくか？」

「ぐっ・・・・・！」

くそぉ！史上最悪の二択だ！

「あ、あの・・・・瀬川、今の話・・・・本当なの？」

「・・・・・・・・・・・・・ハイ。」

終わった。俺の学園生活はここで幕を閉じた。

「そうなんだ・・・・。あっ！ゴメンね？疑っちゃって・・・・・。瀬川がそんな趣味持ってるなんて知らなくて・・・・。」

「ふぐぅぅ・・・・・・・・・。」

涙が！止まらない・・・・・！

「なぁ、もういいだろ？もう行かせてやってくれ。これ以上悲しむこいつを見てられない。」

そういって俺の肩に手を置く良。

「あっ！そうね．．．．。瀬川、本当にごめんなさい。私は、その．．．．応援してるからね？」

もうなんとでも言ってくれ。

そうして．．．．、俺と良は2年になって初めて学園の門をくぐった。

「よかったな和！助かって！」

「お前のせいで．．．．．．．．．！お前のせいで．．．．．．．．．！キ、キキ、キキ、キシャアアアアアッッ！！」

「うわぁ！和が錯乱したぁ！誰か助けてくれぇぇぇぇぇぇぇ！」

そうして俺は、何か人として大切なものと、たった一人の友人を失くしたのだった．．．．。

・・・・・・・・っていうか、良のやつドサクサに紛れて持ち物検査スルーしてるし！ムカつく！！

第八話　クラス分け

「おい、和。新しいクラス出てるみたいだぜ。行ってみようぜ。」

「あ？あぁ・・・・。」

校門をくぐって高等部校舎の方へ良と歩いていたら、何やら人ごみが見えてきた。

どうやら新しいクラスが貼り出されているようだ。しかし俺は今それどころではない。それどころではないんだ・・・・！

「どうしたんだよ？和、さっきから変な顔して・・・・。」

「黙れ！今俺は、校門での出来事をいかに広めないようにするか考えるのに忙しいんだ！」

あんな話、この変人が集まる学園のやつらが聞いたら一瞬で面白いネタにされる！なんとしても広まる前に食止めねば！！

「無駄だと思うけどねぇ・・・・。っと、なんだ！？この人の量は！？」

和の声に反応して俺も前を向く。

「なんだ？って、うぉわぁ！」

そこにはクラス分けに群がる生徒が大量に存在していた。流石超マンモス校、生徒の数も半端じゃない！

「おいおい、こんなん待ってたら、日が暮れちまうぞ。」

確かに、これじゃあ待っている間にＨＲが始まっちまう。

「どうする？このままじゃ遅刻扱いになるぞ．．．．？」

持ち物検査とかしてる場合じゃ無かったなぁ。そう思いながら隣の良をみると．．．．。

「ほっほっほ！まろの行く手を遮るとは片腹痛し！よかろう！ならば見せてくれよう！まろが春休みに会得した１０８の秘奥の一つ！禁断の呪文を！」

なぜか覚醒していた。

「なんだ？どうした？今の一瞬でお前の身に何があった？」

「フン！こんな人混み、この俺にかかれば余裕余裕！」

コロコロキャラが変わるな。まぁいいや。

「ほほぅ。何やら自信満々じゃないか、稲葉君。」

「愚問だな！俺の天才的頭脳を持ってすれば解決できない問題など二つに一つだ！」

「いろいろとツッコミどころ満載だが、とりあえず考えを聞こうか。」

「うむ、心して聞くがいい。」

「了解。」

「いいか、あのクラス分けを見るのは実際一人でいいんだ。一人が

両方のクラスを見れば問題ない。」

「なるほど、わざわざ二人で見に行く必要は無いというわけだな。」

「というわけで、まず二手に別れる。」

「ふむ。」

超珍しく、良がまじめに作戦を立てている。これは期待してもよさそうだ。

「そして、ここが重要なんだが、問題は『気をそらす』ということだ。これが成功すれば勝ったも同然だ！」

「気をそらす？」

「あぁ、今俺達がクラス分けを見れないのは、大量の生徒がクラス分けの紙に殺到して隙間なく密集しているからだ。」

「なるほど、つまりその集中力をなんとかして緩和すれば、隙間が空いてそこに入り込めばクラス分けを簡単に見れるということだな。」

「その通りだ。」

おぉ、これは本当に利に適っている。もしかしたら良はアホにみえて実は切れ者だったりするのかもしれない。

「作戦はこうだ。俺がクラス分けを見に行く間、和は女子のスカートを捲くり続けろ。分かったな！」

「全くもって意味不明だ！！」

やっぱり良はアホだった。

「待て、和。このスカートを捲くるというのは、一見変態な行為に見えて実はそうじゃないんだ。」

「いや、どう考えても変態な行為だろ！」

「いいか、ここにいるのは高校生だ。」

俺の話を聞けよ。

「男子高校生という生き物はスカートが捲られたら必ずそっちに目が行く。っつーか行かないやつは男子じゃない！これは俺が保証する。つまり、この作戦は最も成功しやすい作戦なんだよ。それにこの人混みだ。誰が捲ったなんてわかりゃしないさ。」

「うぬぬ・・・・。」

無駄に納得してしまうところに腹が立つ。だがしかし！何を言われようと俺はスカートなんか捲らない！これ以上変な噂を増やしてたまるか！

「それに・・・・。」

「それに、何だ？」

「入学式の日から遅刻したなんて言ったら、いい加減お前のおばさん帰ってくるだろ？」

「スカート捲りこそ我が悲願！！」

思わず承諾してしまった・・・・。だがそれだけは駄目だ！それだ

けは！！

「よし、じゃあ俺が合図を送ったら捲りまくれ！行くぞ！」

そう言って、良が駆け出す。あぁ！もう！なるようになれ！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「どうだ！？見たか！？」

「あぁ、バッチリだ。」

良の合図で始まった、『スカート捲ってクラス分けを見よう作戦』は無事に終了した。あんなに女子のスカートを捲くったのは初めてだ。やけに白が多かった・・・。いや、なんでもない。

「じゃぁ、早速教えてくれよ。どうだったんだ？」

「あぁ、白が多かったな！」

ボゴォ！！

「オーケー！分かった！俺が悪かった！だからもう殴らないで下さい！！」

「次は殺す！」

「ちゃんとクラスも見たってば、俺達いっしょのクラスだったぜ。8組だ。」

クラス見てなかったら、息の根を止めてるところだ。

「っとやべぇ。チャイム鳴るぜ。早くクラスまで行かねぇと。」

「そうだな、ここまできて遅刻はアホすぎるからな。」

そう言って俺達は足早に自分のクラスへと向かっていった。

変な噂流れてないといいなぁ。

第九話　2年8組

「遅刻だな・・・・。」

「あぁ、完璧にな・・・・。」

俺達は今、自分達の教室、すなわち2年8組の扉の前にいた。すでに中ではホームルームらしき話し声が聞こえる。

そう、俺達はあれだけ頑張ったのに遅刻したのだ。

「まさか中等部まで、行っちまうとはな・・・・。」

「あぁ、流石の俺もあれは予想外だった。」

理由はとても簡単。自分のクラスに向かう途中、とても可愛い中等部の子を見つけて、その子について良と熱いトークを交わしていたら、俺達まで中等部に行ってしまったというわけだ。どういうわけだ？

「まぁいまさらそんなことはどうでもいい。問題はどうやってすんなりクラスに入るかだ。」

「あ？普通に謝って入ればいいんじゃねぇの？」

別にこれぐらいの遅刻大丈夫だろ・・・・。

「あぁ、和には言ってなかったな。」

「何がだ？」

「俺達の担任、般若だ。」

「・・・・・・・・・・・・本気と書いてマジですか？」

「うむ。非常に遺憾ながらマジです。」

高橋香織、通称般若。この学校の高等部の女教師。生活指導も兼任する鬼。去年１年間で行われた悪逆非道の数々（主に俺と良に対して）は数え切れない。力が意味不明なぐらい強く、性格はこの世のものとは思えないほど凶暴。なんでこんな人外が教師になれたのかはもはやミステリーの域。この学校で遭遇したくないランキング？１だが、残念ながらなぜか俺と良はエンカウント率激高。完全に呪われているとしか思えない。ちなみに補習室でのエンカウント率１

００％。あの部屋にいるだけで寿命が縮むと言われている。

「なんでお前言わなかったんだよ！」

「まさか本当に遅刻するとは思わなかったんだよ！」

くそぅ！女子中学生なんか追っかけてる場合じゃなかった！！

「で、どうする気だよ、良。」

「まぁ、まかせろ。」

やけに自信満々だが、本当に大丈夫か？こいつのアイデアはいろいろ欠陥があるからな・・・・。

「安心しろ、今回は一人ずつだ。」

「何が安心なのかさっぱりだが、とりあえず聞こう。」

まぁ、このままじゃどっちみち両方おだぶつだ。それならこいつの考えにのったほうがいくらかマシか・・・・。

「いいか？俺達が遅刻したという事実はもう覆しようがない。」

「あぁ。そうだな。」

確かに遅刻したものを遅刻してないというのは正直厳しいだろう・・・。

「さらに、あの般若相手に素直に謝ったり、変に言い訳しても全く効果はない。特に俺達は。」

「よく分かってるじゃないか。」

普通のやつなら謝れば許してもらえるかもしれないが、去年教室よりも補習室にいるほうが長かったかもしれないと噂される俺達は、下手したら顔を合わせただけでぶっ飛ばされる可能性が十分にある。いや、マジで。

「じゃあ、どうするんだよ？」

「向こうから怒るのを諦めさせる。」

「は？」

何言ってんだこいつ？ついにボケたか？

「謝っても、言い訳しても、強行突破しても無理と分かってるなら相手から折れさせるしかないだろ？」

「まぁ・・・・。でも、どうやって諦めさせるんだよ？」

正直あの人外を諦めさせるのは、良が彼女を作ることぐらい困難なコトのように思うけど。まぁ簡単に言うと不可能だろ。

「とりあえず意味不明なことを言いまくる。」

「その心は？」

「般若に『あぁ、こいつはもうダメだ・・・・ほっとこう。』と思わせる。」

「それはおそらく、クラスに入れる代わりに何か大切なものを失うよな？」

評判とか、クラスの仲間からの信用とか・・・・。

「大丈夫だ。そんなものは元から無ぃ。」

「あぁ。」

そういえばそうでした。

「というわけだ。まぁここは俺に任せろ。和は般若が怒る気を失ったときにゆっくり後から入ってくればいいさ。陰から俺の活躍を見てろよ。」

そう言って、良が教室のドアに手をかける。いよいよ勝負の時だ。頼むぞ良。

ガラッ！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

クラス中の視線が良に刺さる。特に教壇に立つ般若のキレ顔はヤバ

イ。あれはモザイクが必要なレベルだ。大丈夫なのか・・・・・良？多分般若、お前が入ってきただけでキレたぞ・・・・。

「何の謝罪もなく、いきなり入ってくるとは稲葉、いい度胸じゃないか。」

「先生、ボクとステイチューン？」

おおぅ。いきなり意味不明すぎる。もはや会話が成立してないとか言う以前に、日本語になってない。俺だったらいきなりあんなこと言われたらぶん殴ってると思う。

「他に言うことは？」

「あっ！うそっ！？もう実力行使！？そんなバカな！？痛っ！あっ！ダメ無理無理！む・・・・無念。」

パキ。

目にもとまらぬ般若のアイアンクローにつかまった良は子気味良い音をこめかみから発しながら一瞬で床に沈んだ。っておい！無念じゃねーよ！俺、どうしたらいいんだよ！？

やっぱり、般若相手にこんな作戦じゃダメだったんだ！・・・・よし、良とは別に来たことにして、素直に謝ろう。まだ俺がここにいることはばれて－－－－－－

「おい、瀬川いるんだろ？入って来い。」

バレテーラ。

おずおずと、教室に入る俺。まずい！このままじゃ死んでしまう！

「瀬川、何か言うことはあるか？」

落ち着け！考えろ！ここでの返答が唯一の助かる道！ここで選択肢を間違えたやつが死ぬんだ！俺はまだ死ねない！ならば、ここで言うべきことは一つ！

「先生、ボクとステイチューン？」

パキ。

非常に子気味良い音を聞きながら、薄れていく意識の中で俺はこん

なことを思っていた。

『良の言うことは二度と聞かん。』

そうして俺は意識を手放した。

第十話　迷子

般若に意識を刈り取られた後、目を覚ましてみるとすでにそこに般若はいなかった。どうやらＨＲは終わったらしい。

「はー、死ぬかと思った・・・・。」

同じく死に目にあった良が近づいてくる。若干こめかみが凹んでるところがなんとも言えない。

「これから一年間、あれが担任なんて俺達はどうやって生きていけばいいんだろうなぁ・・・・。」

「発想の転換が足りないぜ、和。こう考えれば問題ない。『わざわざ、補習室に行く手間が省ける』とな！」

すげぇ！その発想はなかった！自ら死期を早める発想をするなんて本当にこの男の底がしれない！

「そんなことより、体育館へ移動だってよ。」

「あぁ。入学式か。めんどくせぇなぁ。」

まぁ、気持ちは分かるが、そんなことも言ってられない。そうして俺達は教室を後にした。

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

教室を出た後、俺は一人で第一体育館を目指して渡り廊下を歩いていた。

えっ？さっきまで一緒だったこめかみが凹んだ男はどこに言ったのかって？

ヤツなら『どうやら、身体を浄化する時間がやってきてしまったらしい。』とかなんとか言ってトイレに飛び込んでいったよ。何を言ってるか分からないと思うが安心してほしい。俺にもさっぱり分からない。

「さて、少し急ぐか・・・・。」

あんまりゆっくりしていると入学式に間に合わないからな。そう思って少し早足になる。

スタスタスタ・・・・・・・・・・・・・・・・・・トコトコトコ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・

後ろを振り返った俺の視界に入ってきたのは、小学生ぐらいの背丈をした少女だった。なぜか俺のシャツの裾を掴んでいる。誰？

「・・・・・・・・・・・・お兄ちゃん。」

俺の顔を見上げて、再度呼びかけてくる少女。髪は両サイドで短く束ねられている。目はパッチリしていて将来美人になる予感をひしひしと感じさせる。どことなく普段の愛菜と似たような印象を受ける、大人しそうな少女だ。だが、そのパッチリおめめが今はなぜか濡れている。

「一体こんなところでどうしたんだ？」

とりあえず怖がらせないように情報収集に励もう。まずはそれからだ。

「お姉ちゃんが・・・・・・・・・・・・・・消えちゃった。」

うむ。全く話が見えない。むしろ混乱した。

「消えたって・・・・・・・。はっ！君のお姉さんはもしかして忍者

なのかい！？」

ここは軽く冗談でも言って、気持ちを落ち着かせてやろう。これが高校生の余裕ってやつさ！

「・・・

「うん！お兄ちゃん。」

なんか間違ってる気がするがまぁいいか。なんだか妹がもう一人増えた気分だ。

「それで、ここで何してたんだ？」

「えっとね、お姉ちゃんと体育館に行こうとしてたんだけど、途中でお姉ちゃんとはぐれちゃったの・・・。」

「はぐれた？それまたどうして？」

「なんかね、階段の上からいっぱい人が降りてきたの、その後はなんかもうこうワーってなっちゃって気がついたらお姉ちゃんとはぐれてたの・・・・・。」

なるほど、この学園は生徒数が多いからな、こういった移動の場合は気をつけないと人波にのまれてしまう危険性が大いにある。

「あれ？じゃあ直接体育館に行ったらよかったじゃないか。お姉ちゃんも多分そこにいるだろ？」

小学４年生なら一人で行けるだろうに。

「わ、私、この学園に来るの初めてだから・・・・・。」

そう言って、綾は顔を伏せてしまった。なるほど転校生でしたか・・・・。

「そっか。それじゃ、兄ちゃんが連れてってやるよ。いっしょに行こう。」

「う、うん！」

顔を上げた綾はとても嬉しそうだった。ま、これも人助けってやつですか。

そう思い俺は綾と手をつなぎながら、体育館に向かっていった。

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

ざわざわ、がやがや・・・・・。

「ふわ～～。」

第一体育館に着いた俺と綾は入り口で止まっていた。

「お兄ちゃん！すごいね！遊園地みたい！」

綾は何やらテンションが高くなっている。まぁそれも無理はないよな。この光景を見れば・・・・・。

そう言って顔を向けた先には、様々な制服を着た生徒で溢れかえっていた。

夢ノ宮名物、『小・中・高合同入学式』これはまぁその名の通り、小学校、中学校、高校と全部いっしょに入学式を行うという馬鹿げた祭典みたいなものである。小学校から高校まで合わせた生徒の数は合わせて４０００人を超える。この入学式は始業式も兼ねているのでその名の通り全校生徒が集まる。その会場となる第一体育館は夢ノ宮ドームと言われるほどバカでかい。何からなにまでスケールのでかい夢ノ宮ならではの入学式だ。

「さっ、俺達も中に入って、綾のお姉ちゃんを捜そうぜ。」

「うん！」

そう言って、俺達は体育館に入ろうとした。

「おい、瀬川止まれ。」

そして、なぜか般若に捕まった。ってかおい！あんたどっから湧いて出た！？

「なんすか？先生、こっちは今忙しいんすよ。後にしてもらえます？」

このなんにもしてないのに、こっちが悪いことをしたような空気になるのはどうにかなんないもんかね？

「その忙しいという意味は、その子の身体をクンカクンカして嘗め回すことに忙しいという意味でいいんだな？」

「よくねぇよ！！誰だその変態！？先生なんてこと言ってんですか！？」

あぁ！！そんなこと言うから、ほら周りの視線が痛い！みんな違う

んだ！誤解だ！だからそんな白い目で見るのは止めてくれ！！

「これは別に私が思ったことじゃない。ついさっき、お前が小学生ぐらいの女の子と廊下で会い、その子を嘗め回すように見たあと、そのまま持ち帰りそうだという情報が入ったもんでな．．．．．。」

「駄目だ！先生そいつを早く眼科に連れて行ってください！そいつ、きっと目が腐ってます！」

ちくしょう！一体誰だ！そんな根も葉もない話を！よりによって般若に話すやつは！？

「ちなみに情報提供者は稲葉だ。」

「あンのやろぉぉぉぉぉぉ！！今すぐぶっ殺してやる！！」

あいつ！なんてことをしてくれてんだ！？おかげでこの有様だ！

「まぁ、私も正直半信半疑だったんだが、そこにお前がその子を連れて現れるじゃないか。これは教師として捕まえるしかないだろう？」

「ち、違います！誤解です！そ、そうだ！綾に聞いて下さいよ！それで俺の無実が証明されるはずです！」

そうだ、ここにれっきとした証人がいるじゃないか。なんだ慌てることなかったじゃないか。

「綾ね、お兄ちゃんに連れ去ってやろうかって言われたんだ！だから嬉しくていっしょに来たの！」

「言ってない！そんな危ない言葉は言ってませんよ！綾さん！？」

連れてってやるとは言ったけど！連れ去ってやるとはお兄ちゃん言ってないよ！？そこ重要！間違えちゃダメ！！

「それに、お兄ちゃんね！綾のこと可愛いって言ってくれたあと、好きにしていいかい？って聞いてくれたんだよ！」

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

それは全部名前のことだし！なんか微妙に捏造されてるし！一体俺はどうしたらいいんでしょうか！？

「瀬川・・・・・。お前は馬鹿でも人としてはそれなりに立派なやつだと思っていたんだがな・・・・・。」

ヤメテ！先生！そんな目でボクを見ないで！

「あ！綾！今ならまだ間に合う！訂正を・・・・・・・・・・・。」

そうだ！もう綾の弁明以外に俺の生き残る道は残ってない！勝利の女神よ！俺に力を！！

「あっ！お姉ちゃん！」

そう言って、綾は姉を見つけたのか、あっさりと俺の元から離れていった。冷たすぎやしませんかね？女神さん・・・・・。

「とりあえず、話は署で聞こう。」

「カツどんは出ますか？刑事さん・・・・・。」

「私の昼のパンでよければやろう。」

その優しさが今はなぜか無償に悲しいです・・・・・先生。

そうして俺は今年初の補習室へ連れていかれた。そこはなぜか妙に寒かった・・・・・。

第十一話　テスト

「死ねぇぇぇぇぇぇ！！」

「うわっ！？何すんだ！？和！やめろ！」

「うるさい！黙れ！お前のせいで俺はまた大変な目にあったんだ！死んで詫びろ！」

「あぁ。あれか。いやいや、和があまりにもあの少女をいやらしく見てるから、ついな・・・・・。」

「お前とは一回よく話し合う必要がありそうだ・・・・・。」

こいつのせいで入学式ほとんど参加できなかった。まぁそれはいいか。

入学式を終えた俺達は自分達の教室に戻ってきていた。今日はあとは、明日からの連絡事項を聞いて終わりのはずだ。初日はホント楽でいいなぁ。

ガラッ。

「よーし、抜き打ちテストすんぞー。」

「「「「「「！△♯☆♀？■○♂！？」」」」」」

いきなり入ってきて発せられた般若の妄言にクラスメイト全員が発狂した。ってかどういうこと！？テストって何！？

「せ、先生！いきなりテストってどう言うことですか！？今日はもう解散のはずじゃ！？」

思わず立ち上がる男子生徒。

そうだ！いいぞ！もっと言ってやれ！名も知らぬクラスメイト君よ！

「あー田中よ。私もそのつもりだったんだが、気が変わった。」

「ちょ！ちょっと待って下さい！そんな理由でテストなんてしないで下さいよ！先生はいいかもしれないですけど、僕達生徒にとってテストって言葉は死と同義なんですよ！？」

おぉ！言ってることはちょっと大袈裟だが、般若相手にあそこまで言い切るとは・・・・。田中とやら、やりおるのぉ。

「「そうだ！そうだ！こんなの横暴だ！」」

田中君の言葉を皮切りに、クラス中から反論の声が巻き起こる。この勢いならもしかしたらテスト無しの方向まで押し切れるかもしれない！ファイトだ田中君！

「まぁ落ち着け、お前ら。このテストは中学生レベルのいわば超簡単な復習問題だ。そんなに時間はかからないさ。」

「それならなおさらやる必要なんてないですよ！中学生レベルの問題なんてここの皆なら瞬殺です！先生にそんなに僕達のレベルを低く見られていたなんて心外です！」

全くだ！一体般若は何を考えているんだか・・・・。冗談はその存在だけにしてくれ。中学生レベルだと？そんなもん高2の俺達にとっては赤子の手を捻るも同然。俺達も舐められたもんだ・・・・。

「私も初めはそう思ったさ。でも仕方ないんだよ。」

「何を言われても絶対テストなんて受けませんよ！その単語が出る

だけで僕の心臓は、まるで陸に打ち上げられた魚のように活動を弱めるんです！たまに止まってる気さえします！だから僕は抜き打ちテストなんて認めない！」

「そうだ！そうだ！」
「俺達を殺す気か！」
「早く、帰りたーい！」

とりあえず、田中君は即病院に行ったほうがいいような気もするが、このクラスの団結力はどうやら石よりも硬いようだ。これなら何を言われても結束が揺らぐことはなさそうだな。ザマミロ般若め！

「このクラスには、稲葉と瀬川がいるんだ。」

「先生！早くテストを始めましょう！」

揺らぎまくりだった。

「って田中君！？いったいいきなりどうしちゃったの！？今の般若の言葉のどこに君を突き動かす何かがあったのか俺には皆目見当もつかないんだが！？」

あれっ！？いつの間にか周りの皆も机の上に筆箱だけという臨戦態

勢に！？一体今の一瞬で何があったんだ！？

くそっ！なんだか俺の知りえない水面下で激しくバカにされた気がしてならない！おいっ！良！さっきから一言も話さず真面目に前だけ見てるけど、お前も何か言ってやれ！

そう思い、一番前に座る良のほうを見る。

良は目を開けたまま寝ていた。もうお前帰れよ．．．．。

「よーし、じゃあ始めるぞ～。」

「チクショオォォ！こうなったら実力で全員見返してやる！！」

そう言って結局俺はテストを受けだしたのだった。

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

「今日はなんだか散々だったな．．．．。」

「あぁ．．．．。」

学校をやっと終えた俺は良といっしょに帰っていた。ちなみにあの後、俺と良は仲良く二人で般若の愛の補習授業を1時間みっちり受けてきた。

「まさかの一桁を叩き出してしまうとは流石に予想外だった。」

俺は名前を書いたところまでは調子良かったのだが、その後どうしたのかはもう覚えてない。その結果が一桁だ。

「和はまだいいほうだ・・・・。」

「そうだな・・・・。」

「俺なんか－15点だぜ・・・・。テストに－があるなんて初めて知ったよ。」

「そうか・・・・。」

良はどうやら一人だけ別次元の解き方をしていたようだ。一体何て書いたらそんなことになるんだろうか・・・・。

「それよりも、お前の新しい妹の一人って雅っていう名前？」

「ん？なんで知ってんだ？俺、名前言ったっけ？」

そんな覚えはないけど。

「やっぱりそうか！今日の入学式で新入生代表の挨拶してたんだよ！」

「えッ！マジで！？」

これは驚いた。頭はよさそうだと思ってはいたが、まさか新入生代表とは・・・・。

「頭も良くて、しかもかなりの美人、性格もよさそうだったし、お前の妹にはもったいなさすぎる！俺にくれ！」

「アホか！」

お前は雅の本性を知らないからそんなことが言えるんだ！

「分かった、交渉しよう。交換条件だ。お前には千夏ちゃんやるから、俺に愛菜ちゃんくれ。破格の条件だろう？」

「お前の日本語は高度すぎて、俺にはもうついていけない・・・・。」

こいつは本当に交渉の意味を知って言っているのだろうか・・・・。

「じゃあ今度お前ん家行っていい？新しい妹ちゃん達に会ってみたいし・・・・。」

「あー。まぁそれくらいならいいか。」

そう言うと、良は気持ち悪い踊りを踊りながら喜んでいた。ちょっと早まったような気がした。

「っともうこんな場所か。そんじゃな、和。また明日。」

「あぁ。」

いつもの分かれ道になったところで良と別れる。

「今日一日いろんなことがありすぎて疲れた・・・・。」

そう思いながら、俺は帰宅するのだった。

第十二話　妹論争　前編

「ふぃー。気持ちいいー。」

入学式の次の日である土曜日、俺は朝から風呂に入っていた。というのも昨日は疲れてそのまま寝てしまい、風呂に入れなかったからだ。

そのため早く目が覚めてしまった。時刻はまだ朝の６時３０分だ。

「たまには朝風呂もいいなー。」

そんな久々の爽やかな朝を満喫していたら、ドアの前に人影が現れた。誰だ？

「・・・・・・・・お兄、タオルここに置いとく。」

「あぁ、優希か。ありがとうな。それに毎日お疲れさん。」

「・・・・・・・・・・・・・ん。」

どうやら優希だったようだ。優希は毎日朝早くから外に走りにいく習慣がある。今も丁度走り終えて帰ってきたところのようだ。千夏にも見習わせたいもんだ。

「ごめんな。兄ちゃんすぐに出るから、ちょっと待っててくれ。」

「・・・・・・・・・・・・・・大丈夫。ゆっくりして。」

「ん。そうか？」

自分も早く汗を流したいだろうに、本当に優しい子だ。うちの妹達は皆どこかおかしいが、優希だけは正常な思考回路を持っててくれて、兄ちゃん感動！

「・・・・・・・・・・・・・・じゃあ、お邪魔します。」

「ハイ、いらっしゃい。」

「・・・・・・・・・・・・・・

あ、あまりにもアッサリ入ってくるから、ついうっかり！じゃない！なんで優希はいきなりタオル一枚で風呂に入ってきてるんだ！？

「ゆ、優希！いきなりどうしたんだ！？」

「・・・・・・・・・・・・汗いっぱいかいたから。」

「確かに！確かに理由はその通りかもしれないが！俺が聞きたいのはそうじゃないんだ！」

「・・・・・・・・・・・・？」

あぁ・・・・・。ちょっとこの子もネジが何本か足りないのだろうか？

「いいか、優希。そこに座って俺の話をよく聞くんだ。」

「・・・・・・・・・・・・お兄、いい匂い。」

聞いてない！俺の話なんてこれっぽちも聞いてませんね！？優希さ

ん！

「ダメだ！優希！それ以上近づいたら死んでしまうぞ！！（俺が）」

「・・・・・・・・・・・ん。」

なんでそこでそんなにションボリした顔になるんだ！？なんか兄ちゃんがとっても悪いことしたみたいな気分になるじゃないか！

「・・・・・・・・・お兄は・・・私のことキライ？」

「大好きだ！！」

「・・・・・・・・・・・ん！」

あああぁぁ！とっても良い笑顔で返された！でもそうじゃない！そうじゃないんだぁ！さっきから抱きつかれるたびに何か柔らかいものがフニフニフニフニ・・・！

「・・・・・・・・・・・お兄、鼻から血がいっぱいでてるよ？」

「チョットノボセタカナ？」

いかん！本当にクラクラしてきた！このままじゃ出血多量で死んでしまう！

「・・・・・・・・・・本当に大丈・・・・あ。」

ハラリ。

ブシャアアアアアアアアアア！！

「・・・・・・・・・・タオル落ちちゃった。」

グッバイ・・・・・人生。

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

「兄さん・・・・・朝から何やってるんですか？」

「それが、俺にも何がなんだか・・・・・。」

とりあえず優希と風呂を交代した俺はなぜか妹達に尋問を受けていた。

「朝っぱらから発情してんじゃないわよ！この変態！！」

「俺のせいなのか！？」

さっきから佳奈に罵倒され続けてるわけだが。なんか納得いかねぇ・・・・・。

「兄ちゃん、そんなに妹の裸が見たかったのか？しょうがねぇなぁ・・・・・。」

「お前はとりあえず下を穿け！」

いっつもいっつもパンツ一丁で歩き回ってんじゃねぇよ・・・・・。

「お、お兄ちゃんはお姉ちゃん達の裸になんて興味ないよ！」

末っ子の愛菜が反論をしてくれる。いつもすまないねぇ。

「お兄ちゃんが興味あるのは、私だけだよ！」

「ダメだ！その一言はかなり危険だ！」

愛菜が暴走してる！こりゃマズイ！

あれ？なんか三人の目つきが非常に危険なものになったような？

「へぇ・・・・愛菜。なかなか面白いことを言ってくれますねぇ。」

「兄貴が私に興味がない？愛菜、残念ながらそれは違うわ。兄貴は私に欲情する変態よ。」

「兄ちゃんは私にメロメロなのは間違いないぜ！愛菜はまだまだ小さいから分からないだけだ！」

いたるところからふざけた返答が返ってくる。こいつらには兄に対する敬意というものが絶望的に足りてないような気がする。

「そ、そんなことないよ！お兄ちゃんはかっこよくて、優しくて、私の自慢のお兄ちゃんだもん！それにお兄ちゃんは小学生にしか興

味ないもん！」

いいよ！愛菜！本当に君は妹の鏡だ！だが！最後の言葉だけは兄ちゃん納得できない！

「フフ・・・・。いいでしょう。そこまで言うのなら確かめてみましょう。兄さんが誰を一番好きなのかを！」

あれ？なんか議論が変な方向に向かっているような？

そうして、よく分からない対決は始まった。

第十三話　妹論争　後編

「『第一回誰が一番大好き選手権』始まり始まり～。」

パチパチパチパチ。

風呂からあがった優希を交えて、よくわからない議論は始まった。
朝っぱらから俺は一体何をやってるのだろう・・・・。

「これから、全員に兄さんが自分を一番好きだという根拠を述べてもらいます。そして議論して、最後に兄さんに選ばれた人が優勝です。優勝した人は後日、兄さんを好きにできます。異論はありませんね？」

「「「「異論ナシ」」」」

「ハイ！ハイ！異論あります！ありまくりです！」

いつのまにか俺が景品になってるぞ！？

「景品に発言権はありませんので黙ってて下さい。」

ひでぇ・・・・。

「それじゃあ、早速いってみましょうか。佳奈。」

「えぇ。」

名前を呼ばれて立ち上がる佳奈。

「兄貴が私をす、好きな根拠は、一番最初に戸惑いもせず私の、その、は、裸を見たからよ！」

そう言って、自分が言ったことが恥ずかしかったのか顔を真っ赤にする佳奈。ってかあれは事故だったっつーの。

「裸を見られたから、ね。ちょっと理由としては弱いんじゃない？」

「佳奈も、まだまだだな！」

「・・・・・・・・甘い。」

「佳奈お姉ちゃん、あれは事故だよ。」

周りからは不評のようだ。

「な、何よ！それだけじゃないわよ！わ、私がいなくなったときも、兄貴がみ、みつ、みみみって言わせないでよ！！」

バキッ！

「痛った！？」

顔を真っ赤にした佳奈に突然殴られた。なぜ！？

「ふふん！そんな理由じゃ、好かれてる理由にはならないぜ！」

「あら、千夏はずいぶん自信ありそうね。じゃあ次、千夏いってみましょうか。」

「おうよ！」

そう言って勢いよく立ち上がる千夏。なんでこいつの服装はいつも

俺のTシャツにパンツだけなんだ？

「兄ちゃんとの繋がりは、母さんを抜いたら私が一番だからな！兄ちゃんのことならなんでも知ってるぜ！」

「・・・・・・・長ければいいってものじゃない。」

「うぐッ・・・・・。」

優希の一言に千夏がたじろぐ。以外と優希はストレートにものを言うんだなぁ。

「言ってくれるじゃねぇか。じゃあとっておきの秘話を話してやるぜ。」

こいつ・・・・一体何を言う気だ？

「昨日兄ちゃんは・・・・私のパンツを学校に持っていった。」

「ぶふぉッ！！」

思わず飲んでいたお茶を噴出してしまった。こいつはいきなり何を言ってんだ！？

「聞いたぜ兄ちゃん。昨日兄ちゃんは持ち物検査があったのにそれを振り切ってまで、私のパンツを守りきってくれたんだってな。」

「アホか！そんなわけあるか！あれはお前が落としたんだろ！？」

それよりも、その噂どこまで広まってんの！？俺の評判は大丈夫なのか！？

「その時私は確信したね。あぁ、愛されてるんだなぁって。」

「とりあえず、お前は病院行って頭の中をよく見てもらってこい！」

どんな思考回路してんだこいつは！

「う～ん、ちょっと信憑性に欠けますねぇ。」

「でもその話、中等部で大人気みたいよ？変態現るって。」

「・・・・・・・・・・・・・・・お兄はパンツ好き？」

「お、お兄ちゃんはそんなことしないよ！」

あああ・・・・。なんかもういろいろ取り返しのつかないようなことになってる気がする。

「フフ・・・・・。じゃあ次は私の根拠の話をしましょうか。」

そう言って雅が立つ。もうなんか嫌な予感しかしない。

「兄さんの部屋の本棚の一番下の段の右から４番目の辞書の中身。」

「うわあああああああああああああああ！」

「「「「な！何！？」」」」

千夏、佳奈、優希、愛菜が俺の突然の叫び声に驚きの声をあげる。
でも！今はそんなことはどうでもいいんだ！なんで雅がアレの場所を！？

「フフ・・・・。あの本に出てくる女の子、私にそっくりでしたね。しかもタイトルが『妹パラダイス』なんて、兄さんも物好きですねぇ。」

「もういっそのこと・・・・殺して下さい！！」

あの場所なら絶対見つからないと思ったのに！ってかなんで雅は俺の部屋に勝手に入ってんだよ！この外道！悪魔！兄殺し！

「フフフ・・・・。大丈夫ですよ。兄さん。あの本以外のアレ系の本は全部燃やしておきましたから。ベッドの下のも、引き出しの奥の奥のやつも。」

パタッ。

「お、お兄ちゃん！？どうしよう！お兄ちゃんが息してないよぉ！！」

愛菜・・・・兄ちゃんはもうダメだ。後は頼んだぞ・・・・。

「じゃぁ次、優希いきましょうか。」

俺をこんな目に合わせた張本人は軽くスルーですか。そうですか。

「・・・・・・・・・・・・・・ん。」

小さく頷いて、椅子から立つ優希。もう早く終わらねぇかなぁコレ。

「・・・・・・・・・・・・・・お兄が大好きって言ってくれた。」

そう言って、少し恥ずかしそうにする優希。普段あまり表情を変えない優希だけに、こういう表情は新鮮ですごく可愛い。

「兄さん？」

「兄ちゃん？」

「兄貴？」

「お兄ちゃん？」

残りの４人はナマハゲみたいな表情をしていた。全然可愛くねぇ。あっ、ヤバイ喰われる。本気でそう思った。

「じゃあ、最後は愛菜ね。」

俺はなぜか４人全員に大好きと言わされた。心がこもってないとか散々文句を言われながら。これはあれか？新手のイジメか？母さん僕は今、妹達に苛められています。

「お姉ちゃん達はダメダメだよ。」

若干マイワールドに引きこもりになりそうな俺をよそに議論は続く。ついに最後のトリ、愛菜が立ち上がった。もう失うものは何もない！ドンと来い！

「私はね、知ってるんだよ。お兄ちゃんが小学生に興味津々なことを！」

どうやらまだこの子は俺を苛める気満々らしい。

「ま、愛菜さん？そ、それは何を根拠に言っているのかな？」

「景品は黙ってて！！」

「・・・・・・・・ハイ。」

ついに、お兄ちゃんから景品に格下げされたようだ。泣きそうだ。

「入学式が終わったあとに、初等部でお兄ちゃんの名前がなぜか広まってたの。」

「えっ？なぜ？」

初等部でなんで俺の名前が広まるんだ？

「私もね、なんでお兄ちゃんの名前を皆が知ってるのかわからなかったの。もしかしたらお兄ちゃんはかっこいいから小学生の皆も知ってるのかなって思ったんだけど．．．．。」

「「「それはないわ」」」

おい、優希以外の三人それはどういう意味だ？

「そしたらね、良君が私のところに来てこう言ったの『和が小学４年生の女子を連れ去った。愛菜ちゃんも気をつけてね』って」

「兄ちゃん！？鉄バットなんか持ってどこいくんだ！？」

千夏がなんか言ってるが気にしない。全ての元凶はどうやら身近にいたようだ。

「その時に私は確信したの。お兄ちゃんは小学生が好き＝私のことが好きって」

「もうどこからつっこんでいいのか俺にはわからんよ・・・・・。」

「なるほど。これで、全員ですね。なかなか甲乙つけがたい議論となりましたね。」

どこがだ!?俺が苛められただけじゃねぇか!!

「で、結局のところ兄さんは誰が一番好みなんですか?」

雅のその一言に残りの４人が反応する。こいつらは実の兄に何を期待しているんだ・・・・・。

「・・・・・別に誰でもねぇよ。」

俺の言葉にあからさまにションボリする愛菜と優希。なぜか怒り顔の千夏と佳奈。雅は・・・・・ニヤニヤ笑ってやがる。うぜぇ！

「あー。なんだ。その、俺はお前らの中で誰か一人だけ好きになることなんてねぇよ。比べることもしねぇ。お前ら五人は、その、あれだ。俺の大事な妹だからな。」

恥ずかしくて最後のほうはゴニョゴニョとしか言えなかった。ってかなんで俺がこんなこと言わなきゃならんのだ！

何か文句を言ってやろうと妹達のほうを向く。

すると、なぜかはわからないが、妹達は全員嬉しそうな顔をしていた。

「ま、いいか。」

たったこれだけの言葉で喜んでもらえるのなら、これくらい安いものなのかもしれない。

「よかったですね。千夏、佳奈、優希、愛菜。」

「なんか照れるぜ！」

「わ、私は嬉しくなんかないわよ！」

「・・・・・・・・・・嬉しい。」

「お兄ちゃん、大好き！」

それぞれの言葉が返ってくる。やっぱりちょっとむずがゆいなぁ。

「それでは、兄さん。後日、兄さんを好きにできる権利は全員が手にしたということを忘れないでくださいね？」

「ゑ？」

驚きのあまり変な言葉がでた。

「「「「やったー！！」」」」

後ろでは四人が歓声をあげて喜んでいた。

あぁ。ホント朝から何やってんだろうなぁとつくづく思った土曜の朝だった・・・・・。

第十四話　部活見学　1

キーンコーンカーンコーン。

「む、時間か。それじゃあ、今日はここまで。」

入学式から数日が経ち、俺は普通に授業を受けていた。ちなみに今受けていたのは般若の日本史の授業だ。つまらなさすぎてほとんど寝てたが・・・・・・。

「連絡事項は特に無し。私の授業を爆睡していた稲葉はこの後補習室に来い。以上。」

６時間目の般若の授業が終わり、そのまま帰りのＨＲに入る。そして約一名を除いて解散となる。

「ウェイ！ウェイ！ちょっと待って下さい！先生！なんで俺だけ補習室なんですか！？」

「黙れ！毎回毎回、目を開けたまま寝やがって！キモいんだよ！そんなお前に、もう一度補習室で今日の授業をやってやろうと言うんだ！ありがたく思え！」

おぉ。目を開けたまま寝れる良の睡眠を見抜くとは流石般若だ。

「ぬぐぐ・・・・・・！で、でも！寝てるやつなら他にもたくさんいたはずですよ！瀬川とか！和とか！和樹とか！」

「それは全部俺だ！！」

しまった！思わず叫んでしまった！俺まで巻き添えを食ってしまう！

「まぁ、６時間目だから多少眠くなるのは仕方ないと私も思っている。ある程度は許容範囲内だ。」

た、助かった！今日の般若は心が広いようだ。

「じゃあ俺だって・・・・・・！」

「お前は朝から寝てただろうが！！」

良のやつ、どうにかして俺を巻き添えにしたいらしい。観念して早く愛の補習授業を受けて、男らしく散ってこい！

「それじゃあ、最後にこれだけ聞いてもらえますか。先生・・・・・・。」

「諦めろ、稲葉。私は教師なんだ。一生徒の一言で決定したことを覆すことはない。今回補習室に行くのはお前だけだ。」

おぉ！初めて般若がちゃんとした教師に見える！そうだよな、教師が指導面で私情をはさむなんてあってはならないことだよな。般若、今だけはアンタ、教師の鑑だよ・・・・・・。

「和は先生の授業の直前いつも、『あっ！次、昼寝の時間だ。ラッキー！』って言ってますよ？」

「瀬川、お前も補習室に来い！」

「せんせーーーーい！！」

私情はさみまくりだった。

そうして俺と良は補習室に連行されるのだった。理不尽すぎる・・・・・・。

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

「ったく、お前らはどうしてそう落ち着きがないんだ。」

「「ハイ・・・・・。スンマセン。」」

補習室に連行された俺と良は、１５分ほどの説教を受けていた。流石に般若ももう一度、今日の授業をやるほど暇ではないらしい。

「どうせ、お前らに授業しても時間の無駄になるだけだからな。」

暇では・・・・・ないらしい！！

「今日はこれから会議があるからこれで開放してやるが・・・・。お前らも馬鹿なことばっかやってないで部活でもやってみたらどうだ？」

そう言って、部活見学の紙を渡してくる。

「部活ねぇ・・・・・。」

「まぁ、無理にとは言わんが。見学ぐらい言ってみたらどうだ？」

「考えてみます。」

そう言って俺と良は補習室を後にした。

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

夢ノ宮学園。全生徒数は４０００人を超える超マンモス校。その夢ノ宮がほこる部活動も当然、並のものではない。個々の部活の力の入れ具合もそうだが、何より目を引くのがその数である。

普通の学園ならば、その数はせいぜい２０ぐらいだろう。だがこの学園は違う。野球部といったメジャーな部活から爪切り部といった一体何を目指しているのか全くわからない部活まで、本当に多くの部活が存在する。

その総数なんと２１８。ホントこの学園はいろいろとおかしい。

そもそもなぜこんなに部活が存在するのかという最も大きな理由が、申請の楽さである。この学園の部活動は、活動内容と部員の名前を書けば即活動できる。人数制限は無いし、顧問の先生も決める必要

はない。

学生としてふさわしくない活動内容は流石に許可は下りないが、大抵のことは許される。あとは月一回の活動報告書をちゃんと提出しておけば正規の部活動として登録される。部活申請ができるのは高校からだが、小学生が活動に参加することもできる。

ざっと書いたが、要は大学のサークルみたいなものである。

そして、今は4月の半ば、部活勧誘、見学の時期真っ盛りである。まぁ俺達は2年だが、そこはあまり関係ない。

「どうする？良？」

正直、俺は部活なんて入る気はない。そもそもそんな余裕はない。興味もない。恐らく、良も部活なんぞには興味はないだろう。そんなことをしてる暇があれば、かわいい女子を捜しに校内巡りをするやつだ。

そう思い、良の方を見る。

「ふっ！んふっ！ん～～ふっ！」

鼻息で紙がやぶけそうなほどガン見していた。顔がいろいろと大変なことになっている。

「え？何？お前なんでそんな興奮してんの？」

「よし！和、部活見学に行こう！」

会話が繋がらない。こいつは本当に人の話を聞かないやつだ。

「何？お前部活入るの？興味あったの？」

「部活には興味ないが、女の子には興味ある！」

なるほど、つまりこいつは、部活見学にかこつけて女の子とお近づきになろうと考えているわけだ。実に良らしい考えだ。

「まぁ、いいか。」

「そうこなくっちゃ。」

まぁ、軽い暇つぶしにはなるかもな。いや別に女の子とお近づきになりたいとかそんなことは決して思っていないが・・・・・。決して！！

そんなことを思いながら、俺と良は部活見学に行くのだった。

第十五話　部活見学　2

「で、どうする？どの部活から行く？」

部活見学に行くことになった俺と良は部活紹介のパンフを見ながら廊下を歩いていた。

「とりあえず、女子水泳部から・・・・・。」

「なぁ。少しはその正直な感情を隠そうとは思わないのか？」

そもそもどうやって入る気だ？マネージャー志望とでも言う気かこいつは。

「つっても部活なんか入る気ねーしなぁ・・・・・。」

「もう最悪だな。お前。」

とても部活見学に行く人間の言葉とは思えない。

「とりあえず、真面目にやってそうな部活は止めとこうぜ。流石に

不謹慎だろ。」

「そうだな。」

真面目にやっている部にとっては、俺達みたいな入る気が全くない人間が来ても邪魔なだけだろう。もっとこう軽い感じのテキトーにやっている部に行こう。

「となると、このページはダメだな。」

そう言って、良は部活動紹介のパンフを捲る。今のページは野球部やサッカー部、バスケ部といったようなメジャーな部しか載っていなかった。次のページはどうだ？

『定規飛ばし部』『空を飛部』『ボ部』・・・・・・・・・・・・。

「「ぶふぉっ！！」」

あまりの斬新さに思わず吹いてしまった。

「なんじゃこりゃ・・・・・？何する部活なんだ？」

「・・・・・あぁ。全く内容がつかめない。」

いや、かろうじて定規飛ばし部は分かるが、なんだ空を飛部って・・・・・。この世には良みたいに飛べる人間が何人もいるのか？ボ部に至ってはもうワケが分からない。

「ん？」

「どうした？良？」

「なぁ。これ行ってみねぇ？」

良が指差した先にはこう書かれていた。『すぐに使える魔法部』

「うさんくせぇ～～。」

魔法とかこの世にあるわけな・・・・・いや、実際、良は空飛んでるし、いや、でも・・・・・。

「いいじゃねぇか！ほら！『透視とか出来ます』って書いてあるし！」

「それだな！？お前はその一言で決めたな！？」

清清しいほどの変態だな！こいつは！

「まぁまぁ、とりあえず動こうぜ！場所は・・・・・・。」

そう言って俺達は『すぐに使える魔法部』に行くことになった。ホントに大丈夫か・・・・・？

～～～・～～～～・～～～～・～～～～・

「ここか・・・・・。」

俺達は今、『すぐに使える魔法部』の部室の前に来ていた。

「それじゃあ早速入ろうぜ。失礼しマース。」

そう言って、部室に入る。まぁ、部室といっても空き教室だからそんなに物珍しいものでもないが。

「いらっしゃい。」

部屋の中には、一人の女子生徒がいた。髪は黒のロングで、目鼻立ちはかなり整っている。スタイルは出てるところはしっかり出てて、くびれるところはしっかりくびれている。一言で言うと、かなり美人だ。物腰も落ち着いていて、大人のお姉さんって感じだ。これはぜひお近づきになりたい！

出会いというのは第一印象がかなり重要だ。変態と思われないように、言葉を選ばねば！

「スマセン。透視できるようになるって聞いて来たんですけど。」

もう最悪だよ！良君！？

「フフ・・・。もちろんできるようになるよ、瀬川和樹君。稲葉良君。」

「あれ？なんで俺達の名前を？」

「君達は有名人だからね。知らない生徒のほうが少ないんじゃないのかい？」

まさかまた、補習室関連のことだろうか？

「いや、違うんですよ、去年のアレは・・・・・。」

「去年？何を言っているんだい？君達は今年から有名人になったのではないのかな？」

あれ？今年？ってことはこの人は去年の俺達の黒歴史を知らないのか？

「君のことは特によく知っているぞ？瀬川和樹君。男でありながら、女物の下着を好んで使用し、その性癖は小学生にまで及ぶという真性の変態。学園では一見無害なように見えるが、実は重度のロリコンでシスコンだということが知られている。どうかな？」

「どうかな？じゃねぇよ！何だその情報！？間違いにも程があるぞ！？誰から聞いたそんな噂！？」

「今や学園中の話題だが・・・・・？」

チックショウ！どうりで最近クラスの女子の眼がやけに白いと思っ

た！まだ、そんな噂が流れているとは！

「ふむ。もしかして間違った噂なのかな？どうなんだい？稲葉良君。」

「いえ、本当です。」

「ぶっ飛ばすぞ！テメェ！！」

「いや、あながち間違ってもねぇだろ？お前シスコンだし・・・・ぷぷっ。」

こいつ、面白がってやがる！マジでぶっ飛ばしてやろうか！！

「稲葉君。笑っているが、君も負けず劣らず有名人だぞ？」

「へ？」

「稲葉良君。入学式の日に校門で、猥褻物陳列罪に問われるほどの顔で女生徒に近づき、『サインあげようか？』などと意味不明なことを言って、泣かせた挙句、全国初のマイナスという点数をテストで叩き出した猛者。今や学園の全女生徒から最要注意人物としてマ

ークされているとかなんとか・・・・・・。」

あっ、良が倒れた。どうやらショックすぎて気を失ったらしい。自業自得だ！馬鹿め！

「私の名前は月島葵だ。葵とでも呼んでくれ。2年4組だよ。よろしく。ちなみにこの部の部員は私だけしかいない。私が部長だ。」

「はぁ・・・・・・。」

どうやら同い年だったようだ。年上かと思った。そんなことよりも・・・・・。

「おい、起きろ！良！さっさとここから出るぞ！」

「ふがッ！」

気絶している良を殴って起こす。これ以上この場所にいると心が折られかけない。早く出なければ・・・・。

「おや、もう帰ってしまうのかい？魔法は必要ないのかな？」

「魔法なんてそんなものあるわけないだろ？」

いくらなんでも魔法なんて非科学的なものあるわけがない。

「フフ・・・。ミッ〇ーマウスがプリントされた下着とは、なかなか可愛いものを穿いているじゃないか。」

「な！？」

思わず内股になってしまう。ってかなんで！？なんで分かるの！？

「フフフ・・・・。稲葉君はブリーフか。古風だね。」

そう言われた良のほうを見ると、同じように内股になっていた。ってかお前ブリーフって・・・・・。いや、いいんだけどさ。

「おい！和！」

「あぁ！」

こいつはどうやらモノホンらしい。ホントこの学園の生徒は底が知れない。

「これは、いわゆる透視と言われるものだが、どうだい？覚えてみるかい？」

「「ぜひ！！」」

なんだか下心丸見えな気がするが、気にしない。

「そうか。この透視には少し注意事項があるが、大丈夫かな？」

「「大丈夫です！！」」

透視という秘奥の前には些細な注意事項など問題ナッシング！なんでもござれだ！

「まず、男子しか透けない。」

「「いらねぇよ！！」」

なんだそれ!?使えないにもほどがあるだろ!!俺達の夢を返せ!!

「そうか・・・・・。結構便利なんだが・・・・・。」

なんだ!?お前は一体何にその力を使ってんだ!?

「じゃあ、こんなのはどうかな?」

そう言って、葵はポケットから綿のようなものを取り出した。なんだ?

「まぁ、見ていてくれ。」

そう言って、何やら手を前に出し、力を込め始める。すると・・・・・。

ふわっふわっ。

「「うおっ!浮いた!?」

そう、机の上に置かれた綿が急に浮いたのだ。スゲェ!これは使え

るといろいろ便利かもしれない！

「どっ・・・・はぁ・・・・・どうだ・・・・・はぁ・・・・・驚いた・・・・・はぁはぁ・・・・・か？」

えっ？なんでそんなに疲れてんの？

「ふぅ。どうだ？これを覚えてみる気はあるかい？」

「「ぜひ！！」」

これは使えると便利だろう！荷物とか気にならなくなるし・・・・・！

「ちなみに、これは0，3？以上のものは動かせない。無理に動かせば腕が折れる。しかも動かした後は以上に疲れる。どうだい？便利だろう？」

「「どこがだ！？」」

こいつの魔法マジ使えねぇ！！

「そうか・・・・・だったら次は・・・・・・。」

「いや、もういい！！」

これ以上やってても使えるものがでてくるとは思えない。

「和、行こうぜ。」

良もなんだか疲れた顔をしている。一足早く教室の外に出ていってしまった。

「そういうわけだ。そろそろ俺達は行くよ。」

「そうかい。まぁ気が向いたら、また来てくれ。」

「あぁ。」

多分行かねぇけど。

「それに、同じ2年だからね。また会うこともあるだろう。いや、

私はまた君と話がしてみたい。私から会いに行ってもいいかな？」

「ん、別に構わんよ。」

魔法うんぬんはともかく別に悪いやつではないみたいだし、以外と面白いやつみたいだしな。

「じゃ。」

「あぁ。次に君に会えるのを楽しみにしてるよ。」

そう言われて、俺は教室を出た。

「なんかすごかったな。」

「あぁ。」

教室の外にいた良と渡り廊下を歩く。

「さて、和。次はどこに行く？」

「えっ！？まだやんのか！？」

「ったりめぇだろ！？まだ一つしか回ってねぇじゃねぇか！ほら行くぞ！」

そう言って、次の目標へと歩いていく良。

なんだか嫌な予感しかしないとある日の放課後だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9706y/

Sister　Panic！！

2011年12月15日01時52分発行